〔史料紹介〕

徳川斉荘自筆歌紀行文

原　史彦

はじめに
一　写本の伝播
二　斉荘の事績
三　「夏の日国に帰の記」概説
四　「岐阜の道しるべ」概説
五　「知多の枝折」概説
六　犬山御成概説
おわりに
〔翻刻〕

はじめに

本稿は徳川美術館が所蔵する尾張徳川家十二代斉荘（一八一〇～四五）自筆歌書[1]の翻刻及び解題である。斉荘の自筆歌書は三種あり（以下、一括表現の場合は「斉荘歌紀行文」という。）、いずれも天保十四年（一八四三）の御国入りの年に著された歌紀行文で、徳川美術館では紀貫之の『土佐日記』に擬した和歌まじり紀行文として紹介している[2]。

六月十五日の江戸出立から二十五日の名古屋到着まで十一日間にわたる東海道中歌紀行文「夏の日国に帰の記」（以下「夏の日」という。）、九月二十一日から二十四日まで四日間にわたる岐阜御成歌紀行文「岐阜の道しるべ」（以下、「岐阜」という。）、十月一日から六日まで六日間にわたる知多巡覧歌紀行文「知多の枝折」（以下、「知多」という。）の三種は、尾張藩の「御小納戸日記[3]」といった公式記録では記されない殿様個人の感慨や文化的素養を測る史料として興味深い。徳川美術館ではこれらを「歌書」に分類している。いずれも定家様の書体で、他の斉荘自筆書との比較の上において斉荘の自筆と断定できる三冊である。

斉荘歌紀行文は楮紙の竪本形和綴本で、型絵染による和紙を表紙として用いるが、それぞれの装丁仕様は異なる。「夏の日」は本文三十二丁、縦二六・七糎、横一九・一糎で、黄地紙に杉葉文唐草を緑色で施し、朱地紙の斉荘自筆題箋を貼る。「岐阜」は本文三十三丁、縦二七・三糎、横一八・

八糎で、白地紙に花菱斜格子枠を紺色で施し、水浅葱地紙の斉荘自筆題箋を貼る。「知多」は本文二十四丁、縦二七・一糎、横一九・一糎で、白地紙に火炎龍文の緑色上下帯、中央表裏に番の水鳥と落葉水草流水を朱色で施すが、題箋は無く表紙に直接、斉荘自筆の書名が記される。推敲の跡が無いため、携帯して道中で直接記した手控えではなく清書本である。後述するが、各書には道中景観の描写で前後する箇所があり、紀行と同時進行で記述した内容ではないことが判る。

表紙書・題箋が自筆のため、斉荘自身も装丁作業に直接関与したのだろう。寸法・装丁仕様に差異があるのは、清書・装丁を別々に行ったことによると思われる。「夏の日」の巻末には「天保十四年癸卯年 水無月」、「岐阜」の巻末には「天保十四年九月下浣」、「知多」の巻末には「天保十四といふとし 神無月 はしめつかた」と記しており、三種一括ではなく、各紀行直後にそれぞれの清書・装丁を行ったとみなしたい。

一　写本の伝播

「斉荘歌紀行文」は尾張徳川家当主の直筆記録であるため、本来は一般に頒布する性質の記録ではない。しかしながら、複数の写本の存在が確認できる。徳川美術館には「知多」の写本[4]、名古屋市蓬左文庫には「岐阜」の写本[5]が収蔵されている他、名古屋市蓬左文庫所蔵記録の内、尾張藩陪臣で随筆家の小寺玉晃（一八〇〇～七八）が編纂した「續学舎叢書」廿六[6]に「斉荘公御道の記 岐阜 知多 犬山」として「岐阜」と「知多」が、尾張藩重臣大道寺家の家臣・水野正信（一八〇五～六八）が著した編年記録「青窓紀聞」二十八[7]にも「岐阜」と「知多」が収載されている。「青窓紀聞」所載の「岐阜」と「知多」については、鬼頭勝之の私家版による影印掲載と翻刻及び簡単な解説がある[8]。なお、徳川美術館の写本は、平成十六年（二〇〇四）の購入品で、元は半田の中野半六家伝来本と推測される一冊である。また、『知多郡史 中巻』[9]には「知多」の全文翻刻が掲載されているが、この出典史料の所蔵者は不明である。

この他、桑山好之編『金鱗九十九之塵』（以下、『金鱗』という。）巻第六[10]の、桑山が「天保録」と名付けて収載した記録の中に「岐阜」・「知多」の全文が載せられている。同書刊行本の市橋鐸著「解説」によれば、桑山は名古屋城下伝馬町通武平町の大八車屋の主人で、著名ではないが和歌・俳句・絵画などを一通り嗜む趣味人だったようである。『金鱗』は、本人の趣味の範疇で蒐集・見聞した事項を基に九十九巻にまとめて編纂した名古屋誌であり、編纂年は不明ながら、天保十五年（一八四四）刊行の『尾張名所図会前編』が各巻にわたって引用されているため、市橋鐸は天保末年より弘化年間（一八四四～四八）頃の編纂と推定している。つまり『金鱗』編纂当初の巻に「岐阜」・「知多」が収載されているということは、両書の執筆後、早い時点でその内容が民間に流布したことになる。

これを裏付けるように、名古屋市蓬左文庫蔵「岐阜」写本には「天保十四年卯九月日下部保敬謹写」の奥書がある。同時代の尾張藩士に日下部保敬なる人物を確認できないが、斉荘側近に連なる人物であろうか。「岐阜」の執筆とほぼ同時期に、斉荘はその写本製作を許していたわけである。

また、徳川美術館の写本に附属する「小田切伝之丞（春江）自筆書状 中野半六宛」より、写本伝播の状況の一例が判明する。（／）は改行。筆者加筆。

秋冷相催候 いよ〳〵御安泰／目出度存候 然ハ今度御書物／尾張志御用ニ付 今日／当村より相越候付 一寸／御目ニかゝり度義有之候處／どふか御病中之旨御承知／いたし候付 手紙ニ而申入候／右ハ去年当郡／御成之砌／上様御道の記御出来／尤貴方の御自詠等も／御書のせニ相成居候／右ハはや御存ニ候哉 もし／いまだ御覧なく候ハ、 幸ひ／うつし持参いたし候付／御目ニかけたく いまた／御知人ニ而も無之候得共／とくと／右之段一筆申入候 尤御覧／御座候而御存ならハ 別ニ／御返事ニハ不及御流／可成候／以上

七月廿九日

（裏書）

中野半六殿へ　小田切伝之丞

尾張藩士で絵師の小田切春江（一八一〇～八八）が、半田の海運・醸造業者で尾張藩御用達在郷十人衆の一人だった中野半六へ宛てた書状で、斉荘の御成を「去年」としているため、天保十五年の書状と判る。小田切は、藩命編纂の『尾張志』の挿図を担当しており、その「御用」として半田へ赴いた際、中野に面会を願ったが、中野が病気で会えなかったため、改めて手紙を書き、「上様御道の記」に中野の歌が収載されているので「うつし」を持参して見せたいと書き送っている。この書状によれば小田切と中野は、まだ知己ではないことが判るため、「上様御道の記」を利用して半田の有力者に接近しようとしたのだろうか。小田切の真意はともかく、この書状が写本と共にあることから、徳川美術館所蔵の写本は、この時、小田切が持参した「うつし」の写し、ないしは「うつし」それ自体であろう。一部の尾張藩士が所持した写本を通して、民間に流布していく過程が判る。

他の事例は不明だが、現存する写本・筆写類は、原本を含めて表記の一致をみない。一例として、知多巡覧の際、河和水野家で詠んだ歌として「磯近き 河和の浦に 住田鶴の ちよよはふらむ 声のさやけさ」が、『知多郡史 中巻』では「磯ちかき 河和の浦に 住鶴の 千代よいふらん 聲のさやけき」とあり、漢字・仮名の違いの他、「ちよよはふらむ（千代呼ばふらむ）」を「千代よいふらん」とするなど歌の意も違えてしまっている。翻刻時の誤読とも考えられるが、漢字・仮名使いは原典に基づいていると思われるため、転写過程を現存写本から追うことは難しい。ちなみに、河和水野家屋敷の部材を用いて美浜町総合公園内に新設された水野屋敷記念館前には、斉荘の歌碑が建てられているが、『知多郡史 中巻』に基づいており、原本の歌と異なってしまったのが惜しまれる。

こういった写本製作を許す斉荘の意図は判らないが、多少の自己顕示も含め、近しい関係者に流布することは望んでいたのだろう。書き写した側としても、文化人としての素養を持つ斉荘の賞揚あるいは、斉荘の文化的活動成果の上級藩士ないし一部有識者層に対する共有を図ったのかもしれない。一般頒布を目的としないまでも、特に尾張領国においては一定度の流布があった可能性は指摘できる。

ただし、管見の限り「夏の日」の写本の存在は確認できないため、斉荘が筆写を許したのは「岐阜」と「知多」のみだった可能性はある。「夏の日」の冒頭には、身内である「簾中」について触れた箇所があるため、公表を控えたのかもしれない。

なお、余談だがこの書状内容を信じるならば、天保十五年（一八四四）七月末時点で、小田切はまだ『尾張志』の御用を行っていることになる。こ

れまで『尾張志』の成立は、深田正韶による序の執筆年「天保十四年正月」や、植松茂岳による序の執筆年「天保十五年二月」から同十五年内と推定されていたが、完成・刊行はもう少し後の可能性が出てくる。

二　斉荘の事績

斉荘の主要な事績は『尾張徳川家系譜』[11]及び「田安徳川家系譜」・「系譜」[12]によれば次のとおりである。なお、斉荘の事績については徳川美術館・茶道資料館・日本経済新聞社共催で開催された「殿様の茶の湯―尾張徳川斉荘と裏千家玄々斎―」展における図録『徳川斉荘公と玄々斎宗室』及び、同書における佐藤豊三氏の論考に詳しい。[13]

文化七年(一八一〇)六月十三日(一歳)
十一代将軍家斉の十二男(第三十子)として江戸城中で誕生。生母・興津重辰娘(速成院おてう)。幼名・要之丞。

文化十年(一八一三)十二月二十五日(四歳)
田安徳川家三代斉匡の養子となる。

文政三年(一八二〇)六月五日(十一歳)
元服。十一代将軍家斉の偏諱を与えられて「斉荘」と名乗り、従三位中将兼右衛門督に叙任される。

文政五年(一八二二)正月三日(十三歳)
斎号を「知止」とする。

文政九年(一八二六)二月十八日(十七歳)
田安徳川家三代斉匡の七女・貞愼院猶姫(二十歳)と婚礼を行う。

文政十二年(一八二九)七月九日(二十歳)
参議に叙任。右衛門督は旧のまま。

天保七年(一八三六)八月二十一日(二十七歳)
田安徳川家四代を継承する。

天保八年(一八三七)八月二十三日(二十八歳)
権中納言に叙任する。

天保十年(一八三九)三月二十六日(三十歳)
尾張徳川家十一代斉温(十一代将軍家斉十九男)の歿後養子として同家十二代を継承。同年十二月二十二日、従二位権大納言に叙任。

天保十一年(一八四〇)二月四日(三十一歳)
名古屋初入国。(正月二十三日江戸出立、二月四日名古屋到着。)三月十五日名古屋出立、三月二十六日江戸参府。名古屋滞在四十二日間。

天保十四年(一八四三)六月二十五日(三十四歳)
二度目の名古屋入国。(六月十五日江戸出立、六月二十五日名古屋到着。)
九月二十一日～九月二十四日　岐阜御成を行う。
十月一日～十月六日　知多巡覧を行う。
十一月二十一日～十一月二十三日　犬山御成を行う。

天保十五年(一八四四)二月二十五日(三十五歳)
名古屋出立。江戸参府。名古屋滞在二百六十六日間。

弘化二年(一八四五)七月六日(三十六歳)
逝去(実際は七月二十日歿)。諡号「大覚院殿性譽道隆源懿公」。建中寺(現・名古屋市東区)に葬られる。

斉荘の藩主在職期間は天保十年(一八三九)三月二十六日から逝去する弘化二年(一八四五)七月六日(実際は七月二十日歿)までのわずか六年余のため、

天保十一年と同十四年の二回しか御国入りを行っていない。しかも一度目の名古屋滞在はわずか四十二日に過ぎず、尾張藩主として恒例となっていた領内御成・巡覧は、二度目の天保十四年に行われたのみである。「岐阜」と「知多」は斉荘にとって最初で最後の御成・巡覧記録でもある。

斉荘は天保十四年十一月二十一日から十一月二十三日にかけて附家老・犬山成瀬家八代正住の居城がある犬山への御成も行っているが、この犬山御成に関する紀行文は確認されていない。「岐阜」・「知多」以外の写本が確認されていない事実を踏まえ、犬山御成の紀行文は作成されなかった可能性が高い。『金鱗』でも「岐阜」・「知多」の掲載に続き、犬山御成を一行箇条書きで記すのみである。このこともまた、犬山への御成紀行文が執筆されなかった傍証となろう。

なお、岐阜御成と知多巡覧については、「御小納戸日記」によって「岐阜」・「知多」を補完することができる。天保十四年分七冊の内、岐阜御成は「尾州御小納戸日記　三　天保十四年九月」(以下「御小納戸三」という。)に「岐阜御成一巻」が、知多巡覧は、「尾州御小納戸日記　五　天保十四年十月」(以下「御小納戸五」という。)に「知多郡御巡覧一巻」が収載されている。また、犬山御成についても「尾州御小納戸日記　六　天保十四年十一月」(以下「御小納戸六」という。)に「犬山御成留」を納める。

三　「夏の日国に帰の記」概説

江戸から名古屋へ東海道中各所で詠んだ和歌四十三首・俳句二句を載せる歌紀行文である。天保十四年(一八四三)六月十五日の「辰の時過」(午前八時頃)に江戸市ヶ谷上屋敷(現・東京都新宿区)を出立した際、「物見」より「簾中」(貞愼院猶姫・一八〇七～七二)らが出立の様子を見ていたことが記されており、第一首は簾中に捧げる和歌である。

紀伊藩赤坂上屋敷(現・東京都港区)前を通過する際に、斉荘の行列を屋敷内から「透見」している者がいたことを記した後、赤坂氷川神社(現・東京都港区)での祭礼についても触れている。当時の赤坂神社祭礼は丑・卯・巳・未・酉・亥年の六月十五日に隔年開催[14]されていた。当年は卯年である。この時、神社の位置を「東なる」としているため、赤坂より六本木方面へ出て高輪へ下る行程を取ったことになる。

品川宿で小休止し六郷渡(現・東京都大田区)で多摩川を渡河したが、風が強かったとあり、川崎宿(現・神奈川県川崎市川崎区)で昼飯を取った後、雨が降り出したことを記す。鶴見橋を渡り神奈川宿で「亀の子」という菓子を知った。「亀の子」とは二〇〇五年まで同所若菜屋で製作・販売されていた浦島太郎伝説に基づく「亀の甲せんべい」という菓子で、江戸時代には広く神奈川名物として知られていた[15]。

保土ヶ谷宿(現・神奈川県横浜市保土ヶ谷区)でも小休止したが、またしても夕立に会い、酉の刻(午後六時頃)に戸塚宿(現・横浜市戸塚区)に着いて初日の宿泊地とした。約四十粁以上の行程である。夜になってまた雨が降り出したと記す。

二日目(六月十六日)は、卯の刻(午前六時頃)に出立する。本日は晴れて富士が見えたとある。藤沢(現・神奈川県藤沢市)を過ぎ馬入川(相模川)を渡って平塚宿(現・神奈川県平塚市)で小休止するが、先の酒匂川での増水情報がもたらされた事で、「いまた日も高き」時間帯だが、大磯宿(現・神奈川県大磯町)で宿泊することとなった。それでも戸塚宿より約二十五粁の行程である。本日は嘉祥の日のため、近辺で作られる粗末な「もちひ」で祝い

の代替としている。

三日目（六月十七日）も卯の刻（午前六時頃）に大磯宿を出立し、増水した酒匂川を越えて二宮の梅沢（現・神奈川県二宮町）を過ぎ、小田原宿（現・神奈川県小田原市）を宿所とする。約十六粁ほどの行程だが、次の箱根山越えのために、余裕をもった行程にしたと思われ、まだ日が高いので、歌枕の名所・小淘綾の浜へ赴いたと記す。

ただし、小淘綾の浜は現在の大磯町から二宮町にかけての海岸で、酒匂川の東側である。記述通りならば斉荘が赴いたのは小田原城下南の海岸となるため、前日の大磯宿に宿泊した時の記憶違いか、または小田原の浜を誤認したかのどちらかである。後述するように、一連の著作には斉荘の記憶違いの箇所が散見されることから、小淘綾の浜への来訪は前日の可能性が高い。

四日目（六月十八日）は、夜明け前に出立したようで、「竹に火をともして」の箱根路進行であった。箱根の「山中」・「三ツ屋」で小休止して、富士山が見え隠れする不安定な雲行きの中、三島宿（現・静岡県三島市）で小休止して宿の杜若を愛でた後、沼津宿（現・静岡県沼津市）を宿所とする。この日は約五十粁近い行程であった。

五日目（六月十九日）も卯の刻（午前六時頃）に沼津宿を出立する。原宿（現・静岡県沼津市原）では富士山が見えず、同所の「賤か家」に咲く「木槿」を愛で、吉原宿（現・静岡県富士市）で昼食を取る。富士川も増水していたため船で渡河する。この時に雲間より富士山が見えたと記す。富士川西岸の岩淵（現・富士市岩淵）より無名の坂を経て田子の浦を望んだと記す。この坂は、おそらく現在の富士市中之郷地区から蒲原に下る坂の事を指すと考えられる。蒲原宿（現・静岡市清水区）より由比宿（現・静岡市清水区）を経て由比南の倉沢で海士漁を見た後、薩埵峠（現・静岡市清水区）を越えて興津宿（現・静岡市清水区）に至る。本日も四十五粁近い行程であった。

六日目（六月二十日）は、まず興津宿北にある清見寺へ参詣して三保の松原や東方の浮島ヶ原、西方の久能山を遠望した後に出立し、江尻宿（現・静岡市清水区）で梔子の花を愛で、草薙付近の小吉田（現・静岡市清水区）で「主すし」を堪能する。安部川を渡河して丸子宿（現・静岡市駿河区）で昼食を取り、宇津谷峠（現・静岡市駿河区・静岡県藤枝市）を越え、岡部宿（現・藤枝市岡部町）に至る。岡部宿南の朝比奈川に架かる横内橋で早咲きの萩の花を手折って愛で、藤枝宿（現・藤枝市）を宿所とする。本日は四十粁弱の行程である。

七日目（六月二十一日）は、藤枝宿を出立し、島田宿（現・静岡県島田市）で小休止して大井川を越える。風もなく「やす〳〵」と越えたと記す。金谷宿（現・島田市）を過ぎ、歌枕の名所・小夜の中山（現・静岡県掛川市）の夜鳴き石を見て、日坂宿（現・掛川市日坂）を経て掛川宿（現・掛川市）を宿所とする。本日は三十粁弱の行程である。

八日目（六月二十二日）は、掛川宿を出て袋井宿（現・静岡県袋井市）・見附宿（現・静岡県磐田市）を過ぎ、天竜川東岸の古宿・池田宿（現・磐田市）に着く。雨雲は晴れて天竜川を越え、浜松宿（現・静岡県浜松市中央区）を宿所とする。本日も三十粁弱の行程で終わる。

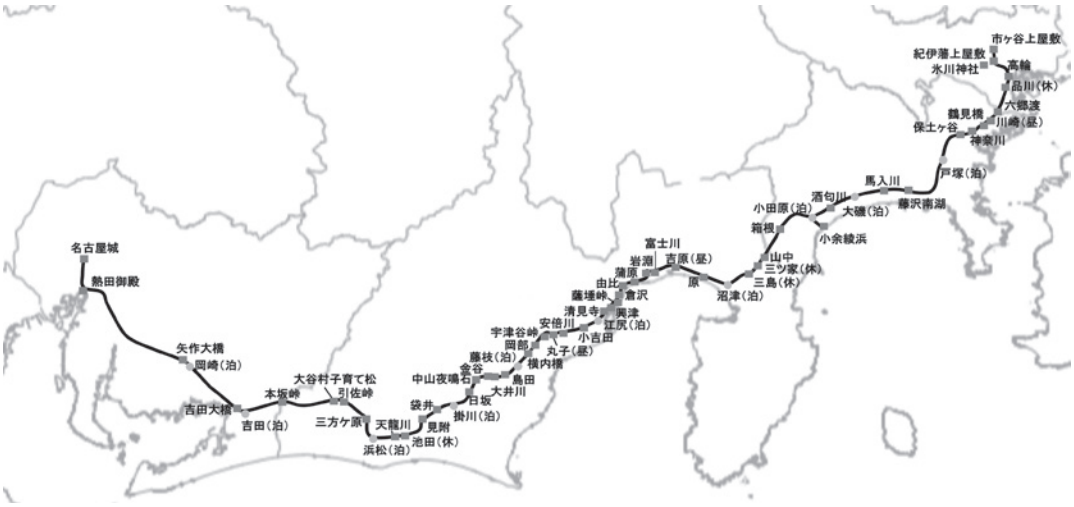
九日目（六月二十三日）は、浜松宿を出立するも、東海道を通らずに北上して姫街道を進む。三方ヶ原古戦場（現・浜松市中央区）から浜名湖北を進み、引佐峠（現・浜松市浜名区）を越える。この峠付近の大谷村（現・浜松市浜名区）に「子そたて松」という「めつらしき松」があるので、立ち寄って願掛けを行ったとある。

現在、この名所は知られていないため、具体的な場所は不明だが、当時は著名な名所だったのか、斉荘が姫街道を進んだ理由の一つにこの松への願掛けがあったと思われる。つまり、「我もこたひ誕生をまつ身なれハ」と記すように、側室の法行院やを（宮田氏）が一箇月後の七月二十四日に四女・清月院鈎姫（一八四三～七一）を生む。[16] この願掛けの後、三河・遠江境の本坂峠（現・浜松市浜名区・愛知県豊橋市）を経て吉田宿（現・豊橋市）を宿所とした。本日は五十粁近い行程であった。

十日目（六月二十四日）は、吉田宿を出立し、豊川の吉田大橋を渡り、岡崎宿（現・愛知県岡崎市）を宿所とする。この吉田大橋において歌を詠んだ事を記すのみで、両宿場間での具体的な記述はない。岡崎宿では明日の入国を控えて祝いの宴が催され、供奉した者に盃を取らせたと記す。この日の行程は約三十粁強であった。

十一日目（六月二十五日）は、岡崎宿を寅の刻（午前四時頃）には出立して夜明け前に矢作川大橋を渡り、鳴海宿（現・愛知県名古屋市緑区）で小休止する。次いで「熱田の別園」（現・名古屋市熱田区）でも小休止を行った。熱田には東浜御殿と西浜御殿の二つの別邸があり、東浜御殿は幕末時点には機能していなかったが、天保七年（一八三六）までの利用が史料的に確認できるため、[17] 同十四年時点における「熱田の別園」がどちらを指すかは判らない。

そして、その日の内に名古屋城（現・名古屋市中区）に到着し、「先の亜相」すなわち、名古屋城新御殿に隠居していた尾張徳川家十代斉朝（一七九三～一八五〇）に挨拶を行って十泊十一日の行程を終えた。最終日は約四十五粁の行程であり、十一日間の一日平均行程は約三十六粁であった。



挿図1 「夏の日国に帰の記」行程図

四　「岐阜の道しるべ」概説

名古屋に入国して三箇月後の九月二十日より、斉荘は岐阜御成を行った。「寅の刻」(午前四時頃)に城を出て、巾下門外の堀川に繋がる大幸川の大幸橋(現・愛知県名古屋市西区城西)を渡って美濃路を進んだ。大幸橋を渡る時、南側の朝日橋を見て一首読むも、本冊を通して斉荘作の和歌は十三首しか無く、古典ゆかりの地の地誌解説に力点を置く構成となっている。

尾張地域に関する引用古典は、『尾張名所図会　前編』[18]掲載の古典と概ね一致しているため、斉荘が同書を参照していた可能性は考えられる。ただし、同書未掲載の古典引用もあり、同書のみに依拠したわけではない。また、同書は天保十五年二月の刊行であるため、刊行前に斉荘は同書を手に入れていたことになる。刊記によれば同十二年十一月には脱稿されているため、編纂者の一人である尾張藩士・岡田啓か小田切春江などを通じて献上が行われていたのだろうか。想像をたくましくするならば、同書の記述に触発されて、岐阜御成の過程で古の歌枕の地を確認したとも考えられる。

最初の由緒地は、菊理姫命を祭神とする白山榎権現(現・名古屋市西区押切)の先にある清音寺(現・名古屋市西区枇杷島)である。平清盛によって尾張国へ流された太政大臣・藤原師長と、彼の侍妾・井戸田村長の娘との悲恋伝説に関わる寺院で、枇杷島地名の発祥となった侍妾入水の地に建立された侍妾の供養寺院である。師長が形見として侍妾に渡したという「白菊」の琵琶(現・皇居三の丸尚蔵館蔵)は、この当時、名古屋城にあったと記されている。本来「琵琶嶋」だったはずが、いつの間にか「枇杷嶋」と名が変わってしまったことを残念に思い、また「琵琶嶋」に戻してほしいとの心情が述べられていることは興味深い。

伊奈備前守忠次による慶長十三年(一六〇八)の備前検地時に設けられた二ツ圦(現・愛知県清須市西枇杷島町)の由緒や、尾張藩勘定奉行だった水野千之右衛門によって、庄内川の洪水対策として天明五年(一七八五)より三年かけて開削された新川の由緒に触れて水野の功績を讃えつつ、清須(現・清須市)の有力者・早川清太夫邸に入る。この邸よりやや離れて「川の亭」があり、ここより右に五条橋が見えたとあるので、同橋よりやや下流に亭はあったと思われる。なお、「御小納戸三」では、清須に着く前に下小田井村(現・清須市西枇杷島町)の矢橋吉右衛門邸で小休止したことになっているが、この記述は「岐阜」には無い。

清須では、同所に因む正徹『慰草』の歌や、『宗長日記』掲載連歌の発句を引用し、御園神明神社(現・清須市一場)や、現存する長光寺六角堂(現・愛知県稲沢市六角堂東町)の由緒を記しつつ、宮重の名産である蘿蔔(大根)のことに触れ、往時の守護所・下津(現・稲沢市下津)で飛鳥井雅世著『富士紀行』や、堯孝法師著『覧富士記』の歌を引用している。

この後、「御小納戸三」によれば一宮(現・愛知県一宮市)へ向かい、赤池村(現・稲沢市赤池町)の安藤助十郎邸で小休止しているが、「岐阜」にはこの記載は無い。また、「岐阜」では一宮手前の妙興寺(現・一宮市大和町)へ立ち寄り、各種の古典籍所蔵に興味を示したものの、時間が無いので休憩だけに留めたと記すが、「御小納戸三」では、往路ではなく復路において妙興寺を「御通抜」したとあるため、この部分は斉荘の記憶違いである。

妙興寺北の牛野(現・一宮市牛野通付近)で、堯孝法師著『覧富士記』の歌を引用しつつ、一宮の地蔵寺(現・一宮市北園通)を経て尾張国一宮・真清田

神社（現・一宮市真清田）へ至り、神主職の佐分但馬守清伯（一七七八～一八五二）邸で昼食を取る。なお、「御小納戸三」では地蔵寺立ち寄りの記述が無いので、門前を通過しただけかもしれない。佐分邸では、赤染衛門や阿仏尼著『十六夜日記』の歌を引用する。佐分邸では清伯による献歌に対し、斉荘が返歌を贈っている。「岐阜」で斉荘への献歌が載せられるのは、この一首のみである。「御小納戸三」では真清田神社に参拝し、「社内」を「御覧」になったとする。

酒見神社（現・一宮市今伊勢町）を経て、歌枕の地・黒田の里（一宮市木曽川町黒田）では、冷泉為相の門弟・藤原（勝間田）長清撰『夫木和歌抄』や正徹の歌を引用する。同じ歌枕の地・玉井の里（現・一宮市木曽川町玉ノ井）は、街道より西方に外れているため、飛鳥井雅世の歌を引用して想いを寄せるに留める。なお、斉荘は酒見神社に「参る」と記すが、「御小納戸三」には酒見神社の記事は無い。また、黒田村の六鹿（虫鹿）常四郎邸で小休止したことが「岐阜」では省かれている。

この後にまた記憶の錯綜が見られ、木曽川渡河後の美濃国伏屋村（現・岐阜県岐南町伏屋）・三宅村（現・岐阜市三宅）の由緒と、天正十三年（一五八五）時の洪水で流路変更するまでの美濃・尾張の国境・境川の記述、御成当時は永井肥前守の居城だが、当初は尾張徳川家初代義直の姉で、徳川家康の長女・亀姫が嫁した奥平信昌築城の加納城（現・岐阜市加納）の記述、岐阜の由緒と岐阜城下町木戸の笠木の由来などを記した後に、また木曽川北岸の円城寺（現・岐阜県笠松町円城寺）に戻って、木曽川渡河の記事を載せる。

木曽川渡河後、円城寺の野垣源兵衛邸で小休止し、「茶亭」でもてなしを受けた。「御小納戸三」では、渡船場で「魚猟」を観覧したとも記されている。木曽川渡河後は美濃路では無く、美濃路東方の地元では御成道と称する現在の国道二十二号線と重なる道を北上していることは、御成道沿いの伏屋村・三宅村の記述があることからも推察できる。細畑（現・岐阜市細畑）にある両天橋が境川に架かる御成道上の橋であり、現在、その南北に接続する部分のみが唯一、旧道の面影を留めている。

両天橋の北で中山道に合流した後、中山道を西進し、「御小納戸三」では領下村（現・岐阜市領下）の遠藤重平邸で小休止したことが記され、その後、加納宿に入って城下町北の広江追分で中山道と分岐して北上した。

岐阜の宿は、岐阜町惣年寄を務めた賀島助右衛門邸（現・岐阜市竹屋町）である。岐阜奉行所（現・岐阜市末広町）の門前にあり、奉行所の地にあった岐阜御殿廃絶後は、同家が岐阜本陣として機能した。賀島家には酉の刻（午後六時頃）の到着であることから、名古屋城からの約三十三粁の距離をほぼ十二時間で踏破したことになる。

同日夜に斉荘は長良川の鵜飼を堪能した。長良川には「ともし火」を掲げた船が「数千々」、鵜飼の舟が「千を重る」と記述するのは誇張としても、相当数の船が川面を埋めていたのだろう。斉荘の船は金華山北麓の鏡岩付近（現・岐阜市水風呂谷）まで上って鵜飼を観覧し、その様を「人にかたるともかたりもつくさし 筆にうつす共 筆にも及はぬは此夜のけしきにそありける」と最大級の賛辞を送っている。また、河原では供の者も含めて鮎を食し、月明かりに照らし出される金華山の山影と篝火の妙を堪能して、亥の刻（午後十時頃）の帰宿となった。

ちなみに「御小納戸三」によれば、八月二十七日の段階で北方代官からの命として、通常の鵜飼船は通常長良方七艘・小瀬方五艘のところ、御成当日は二十一艘にせよとの通達があり、一艘につき鵜を六～七羽使うところ、斉荘の眼前で鵜飼を行う従来の十二艘については各船につき十二羽ず

つ、増船された九艘は五羽ずつ遣うようにとの細かい指示が出されている。また、同書では乗船したのは長良川北の上福光村（現・岐阜市長良福光）金右衛門邸としているため、今は失われた古々川筋での乗船が想定される。

二日目（九月二十一日）は、辰の刻（午前八時頃）に賀島家を出て、金華山登山を行った。順徳天皇の歌論書『八雲御抄』や藤原範兼の歌書の考証を引いて、在原行平の歌にある「いなはの山」とは、因幡国ではなく美濃国の金華山ではないかとする説を紹介しつつ、岐阜城の来歴を略説する。

斉荘は当時、岐阜城の大手口と認識されていた「七曲坂」より登山を行い、織田秀信の家臣・津田藤右衛門の屋敷があったとされる「藤右衛門洞」を経て、「大曲」に至った。ここより岐阜の町や長良川が「亥子」（北北西）方面に見えたとしているため、この「大曲」は、「七曲峠」に至る西側登山道の展望地であろう。この「大曲」より先「七曲峠」を越えて東方山麓にある「達目洞」や、「七曲峠」の南尾根上にあった「樫原の砦」のことも触れている。「樫原の砦」は、石田三成の家臣・樫原某が守衛し関ヶ原合戦時に浅野幸長が攻め落したと考証しており、関ヶ原合戦に関する何らかの記録も参照していたことが推測される。

「七曲峠」から「辰の方」（東南東方面）に「鷹の巣山」とあるのは、現在も金華山主峰南東峰続きにある同名の山でよかろう。「七曲峠」を登ると「申の方」（西南西方面）に大垣城が見えるとする。「七曲峠」の先にある「武藤峠」なる場所は、「む藤九折」と呼ばれる岩肌の屈曲道で「桟」もあり、織田秀信の家臣・武藤某の砦跡とする。おそらく、「七曲峠」から現在のロープウェー乗場脇にある百曲道との交差地点までの中間部に位置し、七曲道脇にある峰状の高まり部分のことであろう。続けて「厩の跡」があったとしている。峰部北の堀切状を呈する平場に、「馬屋」地名が残るため[19]、場所としては符合する。

ただし、それより先に「松田横」という「高き所」という場所は不明である。山上郭にある伝一の門跡南下方の尾根に松田尾砦があり、そこへの道が分岐している箇所とするが、七曲道よりこの峠に繋がる道は現在消滅している。ここより名古屋城や小牧山城が見えたとするので、ある程度、展望が開けた場所だったのだろう。さらに登ると南方に加納城が見えたとある。そして現在、ぎふ金華山リス村となって遺構が大きく改変されている「焔硝蔵」に着くが、この当時はまだ「礎のあと」が残っていたとする。

ここより先は、現在観光開発によって改変著しい部分であるものの、起伏・地形の点においてはやや旧状を遺すことから、往時の景観が的確に描写されていることが判る。「焔硝蔵」の上部には、現在展望施設が設けられている「太鼓櫓の跡」があり、「名のミ残れり」とする。その南下が「一の門」で「大手」とし、その先には現在も残る岩盤を穿った「切通し」があり、「岩石険阻」と描写する。「下臺所」も現在大きく改変されているものの、その入口である「二の門」は今でも虎口の石垣が比較的旧状を留めており、ここでも「その形今に存せり」とする。「下臺所」より尾根上の「上臺所」への道は、現在は幅広に改変・舗装されてしまったが、当時は「岩石険阻にして上り下りなやましき道」であったとする。

「上臺所」には岩盤を穿った井戸が二箇所あり、山上にあって「清水」が湧いていることを「めつらし」とし、「金生水」と称していたとする。ゆえにこの山は「金氣より湧きいつる水」から「金花山」と称したという由来を紹介している。「馬冷場」という水場もあったとする。尾根よりや

や西側に下った場所の、現在井戸跡としている場所のことであろうか。「上臺所」から「天守臺」までは、鞍部を埋めるように石垣を築いて通路状にした遺構だが、これを「廊下の跡」とし、「天守臺」からの眺めは「世に類し」と絶賛している。

「天守臺」からは北東に長良川を挟んで「雄総村」(現・岐阜市長良雄総)、東方に「鵜沼の山」(現・岐阜県各務原市鵜沼)、東南に「各務野」、遠方に「伊吹山」・「養老の山」・「加賀の白山」・「遠近の山〳〵」が見え、名古屋城まで見えたとあるため、天気は良好だったと考えられる。「天守臺」からの眺望箇所についても、古典の知識を披露する。

まず「雄総村」については、藤原(勝間田)長清撰『夫木和歌抄』に「衣笠の内大臣」(衣笠家良)の和歌を紹介し、一条兼良著『藤川の記』・清少納言著『枕草子』・著者未詳『大和物語』に記述があることを述べる。「鵜沼」については、『後拾遺和歌集』所載の源重之の和歌、『藤原仲文家集』所載の和歌を紹介する。その他、「各務野」が「青野」・「加茂野」とともに「三野」と呼ばれて「美濃」の語源となった由来や、山の北東麓にある「鏡岩」で大坂の陣の後、二代将軍秀忠が「水れん」を行ったこと、「外に絶てなき木」である「カゴの木」が生育していることなどを記す。

「岐阜」には下山行程は記されてはいないが、「御小納戸三」には百曲口で下山したと記す。続いて岐阜公園ロープウェー乗り場周辺の「千畳敷の跡」を見て、「岐阜の里」での「機織業」を見学した後、「稲葉山」へ登り、桜の木が多かったことを記している。

但し「御小納戸三」では千畳敷の後、「御鮓元」すなわち、御鮓所(現・岐阜市益屋町)へ入って鮎鮓の漬け込み作業を見学し、予定では七曲口の妙照寺(現・岐阜市梶川町)で小休止した後に、賀島邸で昼食の予定だったが、妙照寺で昼食を取り、賀島邸へは寄らずに「御役所」すなわち、尾張藩岐阜奉行所に入ったと記す。ここで機織を見て同奉行所の前身である岐阜御殿の跡を見学した後に、「因幡山」へ登ったとする。同奉行所南に接する伊奈波神社(現・岐阜市伊奈波通)のことである。

岐阜城遺構や金華山周辺地名に関する名称については、徳川林政史研究所蔵「岐阜図」[20]にも同様の書き込みがあるため、斉荘が記載した名称は当時の認識に基づく名称であり、それが現在にも継承されていることが判る。なお、同図で賀島家は「御宿」と記されている。

三日目(九月二十三日)は、巳の刻(午前十時頃)に出て、城下外の西はずれにある「西かけ所」(現・本願寺岐阜別院[西別院]・岐阜市西野町)に赴き、この庭園にあった「百枝松」を見学する。次に「木材をなりはひとせる者の家」へ行き茶亭に招かれ、長良川を渡り「笹を家の名とせるもの、別園」で昼食を取ったとする。

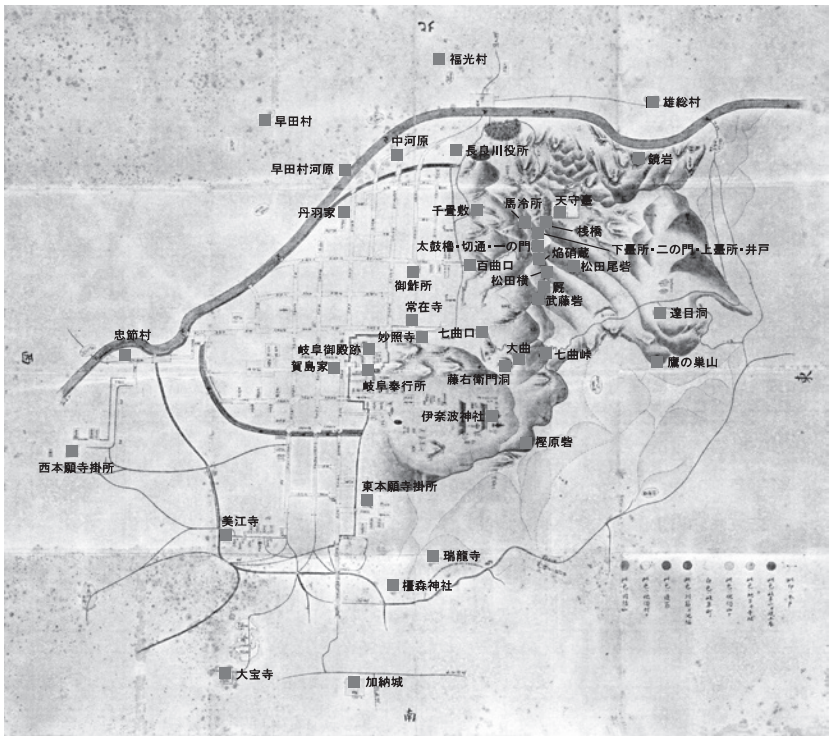
「御小納戸三」によれば、「木材をなりはひとせる者」は材木町の丹羽与惣右衛門、「笹を家の名とせるもの」は上福光村の金右衛門とする。金右衛門邸の「高との」には文台・短冊が用意されていたため、ここでも一首を詠む。「高との」の向かいにはこの別園の亭主の家があり、「いとこけむしてひなひたる」茶亭に興をそそられ、また長良川を渡るが、その際に「鵜遣ふものとも」が鵜に餌をやるのを見て、「手いなつり」という鵜飼漁も見学して、賀島家へ戻った。

「御小納戸三」では複雑な書き方となっており、上福光村金右衛門邸より船で忠節村(現・岐阜市忠節町)辺に行って岐阜町人横山七右衛門が「大網」、忠節村の者が「ていな釣」を披露したとするが、「ていな釣」は早田村河原で見たとも記しているため、このあたりの行程がよく分からない。

忠節村堤で陸地に上がり、以後「因幡山」に入って所々「御覧」になった後に宿へ戻ったと記す。

四日目（九月二十四日）は「寅の刻」（午前四時頃）に賀島家を出立し、木曽川を越えて黒田村の善龍寺（現・一宮市黒田東町）に立ち寄る。「御小納戸三」には行きと同様に黒田村の六鹿（虫鹿）常四郎邸で小休止したと記す。「岐阜」には、この後の行程で記憶違いの記述があり、一宮の妙興寺を「過ぎて」、行きと同様に真清田神社宮司の佐分但馬守清伯邸で昼食を取ったとするが、岐阜方面からの行程ならば、佐分邸は妙興寺の手前である。そして「申の刻」（午後四時頃）に名古屋城に到着した。

最後に岐阜の感想を述べている。当初、斉荘は岐阜のことを「ひなひたる地」であり、「何なくさむるもあるまし」と、田舎扱いしていたが、実際に来てみれば「街の家々はつき〳〵しく」、「いつれもにきはしたり」で、家ごとに「茶亭」を設けるなど、「興さらに尽す心をのこすはかりなり」と評価が一変したことを記す。



挿図2 「岐阜の道しるべ」岐阜町周辺関係地点（「岐阜図」〔徳川林政史研究所蔵〕を基に作成。）

挿図3 「岐阜の道しるべ」行程図

五　「知多の枝折」概説

岐阜御成から帰って一週間後の十月一日より、斉荘は知多半島の巡覧に出かけた。「知多」には斉荘の和歌十八首・俳句二句を載せる他、献納された和歌も八首載せており、本書もまた他の二書と趣を変えている。

出発は「卯の刻」（午前六時頃）で当初は時雨れていたが、やがて晴れになったと斉荘は記すものの、「御小納戸五」では「終日雨天」としている。「四時」（午前十時頃）に山崎村（現・名古屋市南区呼続）の名主・山崎徳左衛門邸で小休止する。「知多」には「茶亭」に招かれ、ここに文台に色紙・短冊が用意されていたことが記されており、山崎の歌への返しとして、一首・一句を贈ったことが記されている。

次に鳴海（現・名古屋市緑区）へ向かい、「御小納戸五」には「九時二寸前」（午前十二時前）に下郷次郎八邸に入って昼食を取り、「九半時」（午後一時頃）に出発したとある。水主池（現・名古屋市緑区忠治山）に幕を張って小休止し、現在師崎街道と呼ばれる知多半島東側の道を南下して、村木村（現・愛知県東浦町森岡）の小嶋源助邸で小休止した。ここでも茶亭に招かれ、床に板硯・色紙・短冊が用意されていたので、一首詠んで小嶋へ贈っている。

初日の宿は緒川の善導寺（現・愛知県東浦町緒川屋敷）で、「六時二寸廻り」（午後六時過・「御小納戸五」）に到着した。この寺の聞慶という老僧が三首献歌したのに応え、斉荘は周囲の卯の花の里に因む歌を贈っている。また、「御小納戸五」には、この時に地元の者による「獅子舞」が披露され、地元の民も拝見し、斉荘自身が行った「御投物」の際に、地元民一同で拾ったと記されている。斉荘が宿泊した書院は善導寺境内に現存している。

二日目（十月二日）は「卯中刻」（午前七時頃・「御小納戸五」）に出発し、藤江村（現・東浦町藤江）の久松市左衛門邸に「五時五寸廻り」（午前九時頃・「御小納戸五」）に着いて小休止し、「九時四寸前」（午前十一時半頃・「御小納戸五」）に亀崎村（現・愛知県半田市亀崎町）の間瀬長左衛門邸に着いて昼食を取った。「知多」にはこの家の「高との」に上がって、海を見渡し、浦での漁労を観覧したと記す。「御小納戸五」によれば、「濱端」、すなわち海岸べりの「別荘」へ移り、この二階より漁労観覧を行ったとする。この時も地元民に対して「御投物」を行った。そして次の乙川（現・半田市乙川）の善次郎邸まで「御歩行」で移動し「七時二寸前」（午後三時半過・「御小納戸五」）に着いたと記す。

なお、「御小納戸五」には道中で「御鷹御遣ひ」をしながら移動したと書かれているので、鷹狩も併せて行ったと思われる。ちなみに「知多」では間瀬家別邸から「伊勢路の山々」が見えたとするものの、この場所からは三河湾しか見えないため、渥美半島の山々を誤認したと思われる。二日目の宿は半田村（現・半田市）の中野半六邸で、「七半時四寸廻り」（午後五時半頃・「御小納戸五」）に到着した。中野が献歌した和歌が「知多」に記されている。

三日目（十月三日）は、「六時四寸廻り」（午前六時半頃）に出発し、「長森」で小休止をした。この地名は現在失われているが、「御小納戸五」では半田より一里十六町ほどの場所で、「大足村」（現・愛知県武豊町中央部付近）の地内とする。「知多」にはこの近辺で鷹狩を行ったことが記され「本邸」より賜った「館塒」と名付けた鷹が見事に鶴を捕らえたことが記されている。「御小納戸五」によれば、その場所を「長尾か臺」とする。名鉄知多武豊駅西側、武豊町役場のある地は「長尾山」の小字名が残るため、地理

的に見てこのあたりの可能性がある。

「御小納戸五」には布土（現・愛知県美浜町布土）の稲生茂助邸に「九時四寸廻り」（午後十二時半過頃）に着いて小休止しているものの、「知多」には単に「布土の里に少しくいこひて」とするのみである。昼食は「八時壱寸廻り」（午後二時過頃）に着いた河和村（現・美浜町河和）の水野惣右衛門屋敷で取った。水野惣右衛門は河和城主水野家の末裔で、尾張藩では二千石を領する藩士であるため[21]、「御小納戸五」には屋敷での御目見・献上儀礼に関する記録が収められている。また、「知多」には同道した鷹匠に対し、鶴の捕獲を「格別」のこととして賞し、盃の下賜を行ったことが記される。

水野家屋敷を「七時」（午後四時頃）に出て、「御小納戸五」では河和より「壱里九町程」とする乙方村（現・愛知県南知多町豊岡）地内の「岡坂山」へ登り、幕を張って小休止したことが記される。現在、この山の名は伝わっていないため、正確な場所は分からないが、師崎街道が山間部を経由する現・南知多町大井付近の山と推定できる。ここの小字・上苗代の山には後に大井烽火台が設けられ、知多半島の海防情報の通信手段拠点となっていた他、烽火台南方の小字・東園付近からはなだらかな坂の先に三河湾を遠望できるため、地理的にみてこの山付近である蓋然性は高い。「知多」では「岡坂山」より「富士の芝山」を見たとするが、この付近から富士山の眺望例は、現時点ではまだ確認されていない。

次に「大井村」（現・南知多町大井）を過ぎて、「御小納戸五」では「片名村」（現・南知多町片名）地内の「ヒエ狭間」で幕を張って小休止し、「山路を登りくたりしつゝ」、師崎の千賀与八郎屋敷（現・南知多町師崎的場付近）に「六時三寸廻り」（午後六時半前・「御小納戸五」）に到着した。この「ヒエ狭間」の地名も現在残っていないが、南知多町片名の成願寺前に「稗田」の小字名があり、谷戸地形になっていること、「岡坂山」より「三十町程」の距離とする「御小納戸五」の記録とも符合するため、この付近である可能性は指摘できる。

千賀家も尾張藩士であるため、水野家と同様の御目見・献上儀礼が行われたことが「御小納戸五」に記されている。なお、片名村でも「漁猟」の観覧が行われる予定だったが、通行が「暮合」に及んだため、中止になったことが付記されている。

四日目（十月四日）は、「六時五寸廻り」（午前七時前頃・「御小納戸五」）に千賀家屋敷を出立し、門前の「濱端」において「御留駕」すなわち、乗物の中より「漁猟」と「鯨付」を見たと「御小納戸五」には記される。現在の師崎港付近のことであろう。この様子は斉荘にとって感慨深かったらしく、「知多」においても漁民の祝い歌や祝賀の様子、再び出猟に至る様について紙面を割いて記述する。

次に西へ進み「辰の刻過る頃」（午前八時頃）に千賀屋敷西側の日和山（現・南知多町師崎字日影）へ登る。「御小納戸五」では「唐船見張番所」とする場所において「嶋々」を「御遠覧」したとする。「知多」には三河湾の日間賀島や篠島・亀島・鼠島の他、三河の山々・富士山を遠望したとする。地理的に富士山が見える位置だが、現在でも確認例が無いため、実際に富士山が見えたのかは疑問である。しかしながら、その眺望については「いはんかたなく 筆にも及ひかたきなかめなり」としており、斉荘にとっては満足のいく眺めだったようである。

日和山を下りた後、西へ進み須佐村（現・南知多町豊浜）の正衆寺に入り小休止したことは「御小納戸五」にのみ記される。「知多」では須佐の入江の波打ち際で、岩に根を張った「恵比寿まつ」を見て歌を詠んだことが記

されている。次の小休止は久村（現・南知多町山海）の内藤傳兵衛邸のため、師崎からは現在の常滑街道を北上したと考えられる。

東端村（現・南知多町内海）の前野小平治邸に「九時三寸廻り」（午前十二時半前頃・「御小納戸五」）に着いて昼食を摂り、「九半時三寸廻り」（午後一時半前頃・「御小納戸五」）に出発する。「知多」に記載は無いが、この先、「小野浦」（現・美浜町小野浦）で「漁猟」を観覧し、「柿並村」（現・美浜町野間）の「大坊」大御堂寺に「八半時弐寸廻り」（午後三時過頃・「御小納戸五」）に到着した。

大御堂寺では現在、国指定重要文化財となっている寺第一の什宝「絹本著色義朝最期図」・「絹本著色頼朝先考供養図」二幅対の絵解きを受けた。この二幅対は藩祖義直の寄進で、狩野探幽十八歳の作とする絵解き台本の記事も記録する。同寺門前の源義朝の首を洗ったという血の池や、義朝塚の他、織田信孝墓・池禅尼墓・義朝の郎党である鎌田政清の墓を僧侶の案内で参拝し、野間の浜で獲れる甲羅が人面状に見える長田蟹についても説明を受けたようで、この蟹についても触れている。

大御堂寺の後は上野間（現・美浜町上野間）の大仙寺に「七半時弐寸廻り」（午後五時過頃・「御小納戸五」）に着いて小休止し、次で大谷村（現・愛知県常滑市大谷）の来應寺でも小休止した後、「六半時」（午後七時頃）に常滑の正住院（現・常滑市保示町）に到着した。

五日目（十月五日）は、「御小納戸五」によれば正住寺の書院縁側において、常滑焼職人による焼物作りを観覧した。「知多」には「此寺の園にそのもふけ」としているため、おそらく器形成形の様子を実演したのであろう。ＩＮＡＸライブミュージアム（常滑市）の解説によれば、この時斉荘に技を披露したのは二代目伊奈長三郎（一七八〇～一八五七）という。

また、成岩（現・半田市）で「住米をなりわひとせるものの母」という人物が、斉荘に歌を献じたことも「知多」に記される。その後、職人たちに「御重詰 御菓子」を下賜して、「御小納戸五」では「六半時」（午前七時頃）、「知多」では「辰の時過る頃」（午前八時頃）に出立したとする。

なお、同寺には文政九年（一八二六）建立の大書院と建立時不明の茶室には、天保八年（一八三七）の落款がある高久隆古（一八〇七～五七）の障壁画が現存しており、斉荘来訪時の空間が遺されている。他にも寛政八年（一七九六）建立の本堂、文政四年建立の玄関、同九年建立の六角堂も斉荘来訪時に存在した建造物である。

次に常滑焼の「竈」がある丘に登って数々の「すえもの洞のことき」窯を遠望している。行程的にみて現・常滑市栄町で「やきもの散歩道」として整備されている岡であろうか。そして大野（現・常滑市大野）の平野彦左衛門邸に「四時」（午前十時頃・「御小納戸五」）に着いて昼食を取った。

この平野邸は大野御殿と称する尾張藩の御殿施設だったが、斉荘来訪時点では尾張藩の資金援助は停止されていたため、御殿は大破した状態だった。そのため、斉荘の来訪に合わせて平野家による自普請で修繕し、斉荘の来訪を迎えていた。[22] 藩としては公的運営を終了した扱いだったためか、「知多」では「御殿」の表記は用いていない。

平野邸より海原を見て、斉荘は眼前の浜を「衣の浦」と認識し、歌を詠んでいるが、西行の歌枕の地として名高い衣浦は知多半島の東岸であって、眼前の浜は潮湯治の名所・大野海岸（現・常滑市大野町～愛知県知多市大草付近）である。これは単なる斉荘の誤認と思われる。平野邸は「九時三寸廻り」（午後十二時半頃・「御小納戸五」）に出立した。

北山長浦（現・知多市長浦）で小休止し、古見村（現・知多市新知）の成瀬半

太夫屋敷へ「八時弐寸前」(午後一時半過頃・「御小納戸五」)に到着した。成瀬半太夫は河和水野家や千賀家と同様に、尾張藩の有力藩士だが、「御小納戸五」においても単に小休止したとするのみで、水野・千賀両家で行ったような儀礼行為は行われていない。

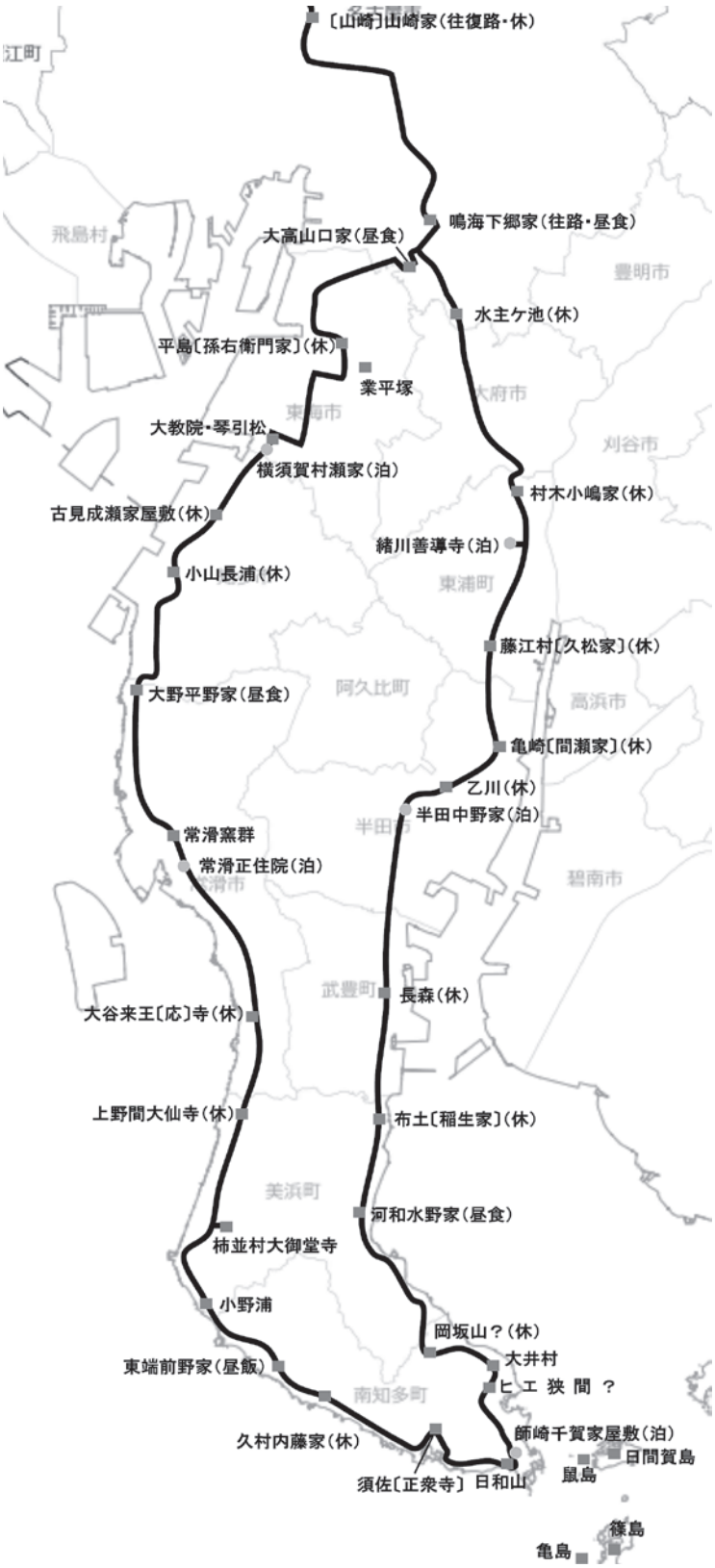
横須賀(現・愛知県東海市横須賀町)の宿所である村瀬彦助邸には「八半時四寸廻り」(午後三時半過頃)に到着し、表店の二階へ通され、横須賀町民による「万歳」を鑑賞した。斉荘は興をそそられたようで「知多」においても紙面を割き、「いと興あり」と記している。その後、村瀬邸の二畳中板の茶亭へ通され、ここにも文台・硯・短冊が置かれていたため、一首・一句を詠じている。

「知多」ではこの後に近くの大教院(現・東海市横須賀町)へ赴き、境内の琴弾松を見て一首詠み、遠方にみえる業平塚(現・東海市富木島町)に対しても歌を寄せている。ただし、横須賀付近から業平塚まで直線距離で三粁あり、簡単に視認できる距離では無い。今川義元の胴を葬ったとの伝承がある今川塚(現・東海市高横須賀町)が、横須賀の北東五百米程の距離にあるため、この塚と混同した可能性はある。あるいは、翌日に業平塚付近を通行した際の記事を、記憶違いで前日の記事した可能性もあるが、琴弾松・業平塚についての記載は「御小納戸五」に見られないため、いずれとも断定できない。

六日目(十月六日)は、「六時三寸廻り」(午前六時半頃・「御小納戸五」)に村瀬邸を出立し、「知多」に記載は無いが、「御小納戸五」では道中「御鷹御遣ひ」を行いながら平嶋村(現・東海市荒尾町)の孫右衛門邸に五時(午前八時頃・「御小納戸五」)に着いて小休止した。「御小納戸五」では、この後に旧大高城跡(現・名古屋市緑区大高町)の一画に設けられた志水小八郎屋敷を「御通抜」したと記す。

大高村(現・名古屋市緑区大高町)の山口源兵衛邸に「九時四寸廻り」(午後十二時半頃・「御小納戸五」)に着いて昼食を摂り、鳴海を経て往路と同じく山崎村の山崎徳左衛門邸に「八時弐寸廻り」(午後二時半前・「御小納戸五」)に着いて、再び茶亭へ通された。巡覧初日に山崎へ贈った歌がすでに軸装されて床に掛けられており、再び山崎より歌が献じられたことから、斉荘は改めて返歌を贈っている。

山崎邸を「八時四寸廻り」(午後三時前・「御小納戸五」)に出立したとあるため、山崎邸での滞在はわずかの時間であり、「酉の時過るころ」(午後六時過頃・「知多」)に名古屋城へ帰城した。名古屋城から知多半島先端の師崎まで約六十五粁であり、往復約百三十粁を五泊六日で走破している。道中、地元民の生業観覧や鷹狩を行う道中であったため、一日平均二十二粁強と、岐阜への道中に比べて緩やかな行程だった。



挿図4 「知多の枝折」行程図

六　犬山御成概説

斉荘の天保十四年中の行動で、歌紀行文がない犬山御成については、池ノ谷匡祐氏による先行研究[23]があり、四代吉通時の御成との比較において、斉荘による犬山御成の分析を行っている。斉荘の御成は、延享四年（一七四七）の八代宗勝以来約百年ぶりの御成であり、尾張徳川家の家督相続をめぐる家中の反発に対し、その改善を試みる斉荘の意思が働いたとの仮説を提示している。ただし、藩財政の逼迫や前年に罹災した犬山城松之丸御殿の復旧事情に配慮して「諸事手軽」の立ち寄り形式での御成としたが、吉通時とは異なり旅程を二泊にして成瀬家との親交を深める機会を増したと分析している。

斉荘の犬山御成の内容については、「御小納戸六」を基にした池ノ谷匡祐氏の論考に詳しいため、詳細は同論考を参照していただくとして、以下、その概略を記述する。同年十一月二十一日卯の中刻（午前五時頃）より上街道を「放鷹」しながら北上し、味鋺原新田（現・愛知県春日井市味美白山町付近）新次郎邸で小休止する。小牧御殿（現・愛知県小牧市小牧）で昼食を取る。小牧御殿は天明二年（一七六五）に荒廃したという記録はあるが[24]、御殿守である江崎家によって何らかの維持管理を行っていたことが判る。

小牧御殿を八半時（午後三時頃）に出立し、楽田村の永泉寺（現・愛知県犬山市裏之門）で小休止した。犬山城主「成瀬隼人正」（八代正住）は、楽田村北の羽黒村（現・犬山市羽黒）まで出迎えに赴き、先導して犬山城へ向かった。同城の南麓にある宿所の松之丸御殿には「七半時壱寸廻り」（午後五時頃）に到着。一旦休息した後、夕食の後に成瀬や家中との対面・盃の儀といった政治儀礼が行われた。

二日目（十一月二十二日）は、五時（午前八時頃）に出立。榊門・内田門を抜け丸山下（現・犬山市白山平）で「赤絵焼竈場」を観覧した。犬山焼の窯元尾関家のことと思われ、前年の大火で丸山下へ移転した直後の来訪であった。斉荘来訪時の主屋が現存する。ここでは自ら製作及び赤絵付けをした他、製品の買い上げも行ったと記される。ただし、七代尾関作十郎である尾関立志氏の指摘によれば、北方の日本モンキーパーク付近にあった窯場への来訪である可能性もあるという。次いで「継尾観音」（継鹿尾観音）と称される寂光院（現・犬山市継鹿尾）へ参詣して小休止の後、松之丸へ戻って昼食を取った。

昼食後、本丸へ移り天守を巡覧する。次いで天守東側の「七曲埋門」より北麓へ下って木曽川を渡河し、対岸より犬山城を遠望。「鵜飼屋渡」（現・岐阜県各務原市鵜沼小伊木町～犬山市西古券）で乗船して、城下西部の「鵜飼屋町」（現・犬山市西古券）で上陸し、城内南西部の「三光寺山」（三光寺御殿）に入った。ここではまず「数寄屋」で成瀬の点前による茶事が行われ、「御披之間」で夕食を取った後、「夜六半時三寸廻り」（午後七時半過頃）に松之丸御殿に戻った。

三日目（十一月二十三日）は卯の中刻（午前七時頃）に松之丸御殿を出立。行きと同様、楽田村の永泉寺で小休止し、各所で「鳥附」や「御捉飼」を行いながら、小牧の西源寺前（現・小牧市小牧）で行列を整えて小牧山へ登った。下山後九時（正午頃）に小牧御殿において昼食を取り、上街道を南下して名古屋城へ戻っている。

以上「御小納戸六」の記録からは、尾張藩附家老であり筆頭重臣・成瀬

家の居城への御成という面があるものの、他と同様に道中での鷹狩や犬山焼を楽しむなど、斉荘の嗜好も組み込まれており、そういう意味においては岐阜や知多への行程内容と、それほど違わない。

ただし、岐阜・犬山へは「御成」の語を用い、知多へは「御巡覧」とする。この言葉の使い分けは明確ではないものの、池ノ谷匡祐氏の分析では、四代吉通時は犬山城で三献や太刀の献上・下賜儀礼を行っていることから、将軍家の御成と同様の儀礼が尾張家中でも行われていたとし、この儀礼の有無により「御成」か「御巡覧」かの違いがあったと推測する。この見解は概ね首肯できる。斉荘の場合は「諸事手軽」とされ、供の役職人数の内訳や、こういった儀礼は省かれたため、形態的には「御巡覧」だったが、慣例に基づき「御成」と称したのだろう。ただし、儀礼等の有無で言葉の使い分けをしていたとするならば、岐阜では誰に対して御成の儀礼を行ったかという疑問が生じる。斉荘の時代では既に形骸化した行事となっているため、天保十四年時の記録のみで言葉の違いを明確にすることは難しく、初期の事例で検討する必要がある。このことは今後の課題としたい。

おわりに

これまで見てきたように、「斉荘歌紀行文」は、天保十四年(一八四三)に行われた斉荘の行動に伴って詠まれた歌を中心に、歌紀行文としてまとめた歌書である。歴代の中で同様の記録を残した当主は管見の限り確認できないため、事項のみを羅列する公式記録では窺い知れない風景描写や、何より当主の心情が判る貴重な記録である。ただし、斉荘自身はこれらを道中記録として執筆したわけではないということに留意する必要がある。

「斉荘歌紀行文」は、佐藤豊三氏も指摘するように[25]紀貫之著『土佐日記』に擬した体裁が取られている。日記的な要素は持つが、それ以上に文芸的色彩の濃い内容となっている。先述したように、「岐阜」と「知多」の行程は、公的記録である「御小納戸日記」によって補完できることで、実際の行動と、「岐阜」・「知多」の記載内容に齟齬、すなわち記憶違い・事実誤認があることが判明する。つまり、両書の記載内容は、正確な記録ではないわけである。斉荘が目指したのはあくまでも古典に倣った歌書の製作であり、記録としての正確性には注意が払われていない。「斉荘歌紀行文」は、斉荘作の文芸作品として評価する事を第一義とすべきで、道中記としての記録性においては、他史料との比較の上において検証を必要とする。

その上で改めて「斉荘歌紀行文」を体裁的にみるならば、「夏の日」は自詠和歌・俳句主体、「岐阜」は古典検証、「知多」は文芸交流を含む点にそれぞれの個性を見いだせる。「夏の日」における道中描写は必要最小限であり、特に後半になるに従い、各所における自詠和歌・俳句を主に書き連ねる体裁となる。「岐阜」は、風景描写が細密になると共に、古典引用も各所に見られ、一種の地誌的要素も含む他、自詠以外にも献歌分の記載が見られるようになる。「知多」では「岐阜」と同様の風景描写はあるものの、古典引用は無く、献歌分の記載が増える他、一部ではあるが地元民との交流描写も詳しい。意図的に体裁を変えたのか、結果的になったのかは不明だが、三種三様の体裁は斉荘の歌人としての幅という理解でよいのではなかろうか。

なお、「御成」にせよ「御巡覧」にせよ、尾張国主の行事であるため、相応の規模で移動が実施されている。随行する人員について、池ノ谷匡祐

氏は犬山御成で吉通時に約九百人、斉荘時で約千人弱という数字を記録から算出している。「御小納戸三」では岐阜道中の行列書と長良川の乗船行列書、「御小納戸六」では知多への行列書が掲載されており、ある程度の規模は判明する。ただし、一部に人数記述はあるものの、役職のみの記載が主のため、駕籠舁きや道具持ちの役務においては、それに何人が携わったのかの記入が無く、「御小納戸三」からは正確な数は割り出せない。

あくまで役務名及び人配置で見るならば、「御小納戸三」の道中行列書には百二十八、同書の長良川乗船行列書では十七、「御小納戸六」では百三の役務名の記載がある。同じ役務か別の役務かの判別が難しい箇所もあるため、この数値は必ずしも正確とはいえないが、相当数の随行があったことは確かであり、「天保十四年殿様知多郡御巡覧御触状」[26]の中には、宿泊・応接が予定されている村々に対してそれぞれに五百人分の「夜着」・「ふとん」・「敷蒲団」・「膳椀」の用意の令状があり、相当の準備負担が道中村々に課されていたことが判明する。

また、「御小納戸日記」の記載を見ると、行く先々で献上があり、それに対応する下賜はあるものの、尾張家当主を迎えるにあたり村落共同体挙げての接待が行われていることが記されている。岐阜では鵜飼観覧、知多での漁猟観覧や伝統芸の披露などで動員が掛けられた他、馬継の手配もあり、当然のことながら同行する藩士たちの宿所手配といった対応も求められたはずである。岐阜・知多・犬山への巡行は歴代当主が御国入りした際における恒例の行事だが、それを迎える側にとって、その負担は決して軽くは無かったと考えられる。

このことに関しては一例として『御日記頭書 四』[27]にある八代宗勝が就任した元文四年(一七三九)の記事が如実に物語っている。

一　此年知多郡為御巡見可被為成之処在々困窮に付諸向御用捨之思召を以当御在国中御延引被仰出

同書の同年三月二十二日の記事では、「前々御領知御収納御不足」のところへ、今回の代替わりにおいて「莫大之御物入」が重なったため、「御領国中一統及困窮」となり、家中に対して「厳敷御倹約」が命じられている。その上、知多への「御巡見」ともなれば、さらなる疲弊となるため、宗勝初入国における恒例行事は中止となった。

本稿はあくまでも斉荘による文芸作品としての内容紹介と、尾張徳川家当主側の視点でみた巡行実態の考察に留めたが、政治史・地域史の観点で見た場合、領内支配の一形態として別の観点からの評価は必要である。当主が見たのどかな風景・動向の背後にある諸事情を掘り下げない限り、当主巡行の歴史的評価は定まらないであろう。今後の課題としたい。

註

(1) 歌書一五。桐印籠蓋造箱入。

(2) 『尾張徳川家初代義直襲封四〇〇年　尾張の殿様物語』(徳川美術館　二〇〇七年)。

(3) 徳川林政史研究所蔵。尾二―七五。天保十四年分全七冊。

(4) 「知多御道の記写 附 小田切伝之丞(春江)自筆書状 中野半六宛」(写本六)。一冊・一通。外題「知多御道の記」。桐被蓋造箱入。

(5) 名古屋市蓬左文庫蔵(二七―三三)。一冊。外題「岐阜の道しるべ」、内題「齊荘卿御道の記」。

(6) 名古屋市蓬左文庫蔵(旧蓬左一〇―一)。全二十六巻二十二冊(十三・十七・二十一・二十五巻は欠本)。表題に「犬山」とあるが、犬山への御成について

は、御成の日時と犬山城三光寺御殿で詠んだ歌を記すのみである。

（7）名古屋市蓬左文庫蔵（三三―三）。全二百四冊。

（8）鬼頭勝之「尾張藩主斉荘の『岐阜の道しるべ』を読む～影印・翻刻及び解説～」（私家版　二〇一五年）。鬼頭勝之「尾張藩主斉荘の『知多御道之記』を読む～影印・翻刻・及び解説～」（私家版　二〇一五年）。

（9）『知多郡史』（知多郡役所　一九二三年）

引用は、『愛知郷土資料叢書　第九集　知多郡史　中巻』（愛知県郷土資料刊行会　一九七二年）。

なお、本稿脱稿後、中京大学にも「岐阜」の写本がある旨の指摘を徳川美術館より受けたが、筆者未見のため、情報紹介に留める。

（10）『名古屋叢書第六巻　地理編（一）　金鱗九十九之塵　上』（名古屋市教育委員会　一九五九年）。

（11）名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書三編　第一巻　尾張徳川家系譜』（名古屋市教育委員会　一九八八年）。

（12）斎木一馬・岩沢愿彦・戸原純一校訂『徳川諸家系譜　第三』（続群書類聚完成会　一九七九年）。

（13）佐藤豊三「尾張徳川家十二代斉荘と茶の湯」（『徳川斉荘公と玄々斎宗室』茶道資料館　二〇〇三年）。

（14）斎藤月岑著『東都歳事記』六月項（朝倉治彦校注『東洋文庫177　東都歳事記』2　平凡社　一九七〇年）。

（15）横浜市神奈川図書館編『資料でたどる亀の甲せんべい』（横浜市神奈川図書館　二〇二一年）。

（16）註（11）参照。

（17）原史彦「熱田東浜御殿・西浜御殿の成立と終焉及び構造の分析」（徳川林政史研究所『研究紀要』第五十五号　二〇二一年）。

（18）『尾張名所図会』上～下巻（愛知県郷土資料刊行会　一九一九年・一九七三年再復刻）。

（19）中井均「岐阜城跡」（岐阜県教育委員会編『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第二集（岐阜地区　美濃地区）岐阜県歴史資料保存協会　二〇〇三年）。

（20）図物甲六八四　縦一二三糎・横一三七・五糎。

（21）「士林泝洄」巻第七十七（『名古屋叢書続編　第十九巻　士林泝洄（三）』名古屋市教育委員会　一九六八年）。

（22）原史彦「尾張領内御殿の存亡と機能（上）」（徳川林政史研究所『研究紀要』第五十六号　二〇二二年）。

（23）池ノ谷匡祐「尾張藩主の犬山御成―四代吉通と一二代斉荘の比較を通して―」（公益財団法人徳川黎明会編『金鯱叢書―史学美術史論文集―』第四十八輯　二〇二一年）。

（24）註（22）参照。

（25）註（13）参照。

（26）南知多町史編さん委員会編『南知多町史　資料編4』（南知多町　一九九五年）。

（27）『名古屋叢書 第五巻 記録編（二）』（名古屋市教育委員会　一九七二年）所収。

〔附記〕

本稿執筆において、歌意の確認のため歌人・千種創一氏に貴重な助言をいただいた。犬山焼本窯元尾崎作十郎陶房・尾崎立志（七代尾崎作十郎）氏には窯の来歴の助言及び同家主屋内のご案内、善導寺御住職・坂野幾洋氏と正住院御住職・堀田和秀氏には寺内建造物のご案内の便宜を図っていただいた。末筆ながら記して謝する次第である。

（名古屋城調査センター副所長補佐）

①（表紙・題箋）
「夏の日国に帰の記」

（本文）
水無月望の日辰の時過
る頃 市ヶ谷なる屋形を立
出て帰路におもむきたるに
朝より空晴わたりたり
我旅立さまを見むとて
簾中をはしめ物見にて
見立たるを見てよみける
思ひたつ 暑さも
なつの旅衣 またくる
はるを ともにまた
なむ

紀伊の物見の前を通るに
透見したるさまなれは よそ
なからわかれをさくる心にて
旅衣 立わかるれと
たますたれ こすの
うちとに 心へたつな

東なる赤坂のふとうをすき
行にけふなん氷川の神の
祭りとて家ことに幕引
廻して人々競ひつ、いと
いさましさを見てよみける
夏の日も 氷川の
かみの名にめて、
筒も鼓もす、しむる聲

程なく高輪の驛にてよみける
海原や 塩風荒て
たつ浪に 沖の
かもめの 浮しつミつ、

品川の驛にて小休してほともなく
六郷を渡る頃は 風いとあらけれ
と 舩は平にてこえけれは
乗合の 舩路は
あつし　旅衣

川崎の驛にて昼の飯をと、
のへて行程に 折ふし雨のふり
出けれは
浮雲に さそはれて
ふる村雨の 森のあなたに
薄日さすかけ

鶴見橋を渡りて見るに
鴻の四五羽ほとむれゐるを
見て
鶴の名を かりてそ
田居にむれゐるを 鴻
とハたれも おもはさらなむ

神奈川の驛にて亀の子と名を
よひし菓子ありと聞て たは
むれによミける
萬代の 亀の齢の
なくよしみ くはしと
いへる 人もなきまて

程ヶ谷にいこひて立出しに
俄に夕立のふりけるを見て
夕立の 程よく
ふりし ほとか谷の
跡よりはる、 山の浮雲

酉の時過る頃 戸塚の宿につ
きぬ また雨の降出しけれは
とりあへす
磯の家の 園の
あつさを はらはんと
ふりはへてふる
雨にもあるかな

十六日夘の時 戸塚を立出て
しに 朝より空晴て不二の
見えけれは
空晴て 近くも
見ゆる 不二の山
ふる郷遠くなりに
けるかも

藤澤南湖を過行ハ ほと
なく馬入川にいたりぬ 此川
を渡りて平塚の宿にて
いこひ 大磯のやとりにつきて
聞けハ 酒匂川の水増りて
渡りかたけれは 此大磯の
驛にいまた日も高きにとまりぬ
けふなむ嘉祥の日なるに 旅
にしあれは そのもふけもなく
此わたりの家にひさくも
ちひをもて人々にとらせたり
こやけふの祝井のしるしはかり
をそなしにけり 夘の時過る頃
このやとりを立出 酒匂川に
きて見れは 水の勢ひ さか
巻かことく 是にてハきのふ
とまりしもうへなりとおもひ
き

酒匂川 まされる
水は ふる郷に わか
れをしみし 人の涙か

梅澤を過て行にた、浪の
音はかり聞えけれは
磯近く おとに
たてつ、 海面ハ はて
にそ見えね 浪の白雲

十七日小田原のやとりに着しに
未日も高けれはとて 小ゆる

きのはまといへる所に行て
そこ爰うち路つ、
足柄の 山見え渡る
うみとりや ひく細
舩の 小ゆるきのはま

いまた明はなれぬころ 此や
とりを立出 さかねたる
竹に火をともして道を
照らして行つ、 箱根の
山を登るに 空かき曇り
雲霧ふか、りけれは
玉櫛笥 箱根も
いたく霧こめて
心あてなる 山たにも
見す

山中の宿に休てよみける
かきくれて
人里遠き山中に
た、こま鳥の聲
のミそする

山中を過てゆくに雲の
はれ間に不二の見えつ また
曇りつ、定なき空を
うち路て
富士の根の 見えつ
かくれつ いく度も
おもはせふりの
うき雲の空

三ツ家に休てほとなく三嶋
にてまたいこひぬ 其宿の池
にかきつはたの咲たるを見て
東路の ゆかり
なつかし 此池に
いまを盛の
かきつはた
かな

十八日沼津の驛にやとりて
あくれハ夘の時より此やと
を立出て行に 原より不二
も見えす曇りにけり 此驛
の賤か家に木槿の咲たる
を見て
賤か家の むくけの
はなもめつらしみ
手折てゆかむ
旅のなくさに

吉原の驛にてひるの飯
と、のへて行くほとに 不二川
の渡り水ましけれは 舩に
のりてふりさけ見るに
冨士の山 雲間より見えたるを
ことわりや その名も
高き不二川に よせくる
波も 音にたてつ、

岩渕を過て七な無し坂より
田子の浦の眺望かきりなく
田子の浦や いく世
なかる、 水なれと
ことわりおきし
不二の芝山

蒲原の驛を過て行とも
なく由比にいてぬ くら澤にて
海士に蛸を取せたり
荒磯に うきつ
しつみつ 海士人の
蛸とる手の ひまも
なきまて

薩埵峠にて
登り行 さつた
峠の あつき日や
梢にとまむ 蝉の
こゑ〳〵

十九日興津の驛にて
興津風 荒磯
なみの 音高く
海士か家居を
浦傳ひして

名に高き清見寺に登りて
三保の松原 うき島か原 久の、山も
見えけれはよみける
海原や 心うき立
うき嶋に くまなき
不二を 三保の松原

かけ高き 久能の山の
かけうけて 磯うつ
波に 浮嶋の原

江尻の宿に口なしの盛なる
を見て
東路は いかにや
遠く過来ぬと
とはましものを
口なしの花

小吉田に休たるに 主すしを
出したるをたふへぬるに
味ひよく覚れは戯に哥
よミける
よしやよし
こ、は小よしの 宿
なれは 東にまさる
鮓の味ひ

安倍川をこえて丸子の宿に

てひるの飯と、のへてやくに程
なく宇都の谷といふ峠
を越るに
旅衣 蔦の細道
わけゆけは 暑さハ
いと、 宇津の山越

岡部を過行によこうち橋と
いふをわたるに左右に薄の
穂にいつるかと見ゆるあり
手折せて見れは萩なり
秋またて 穂にいてぬ
らむ はつ尾花
をはなと見しは
萩にそありける

横うちの橋とハ
きけと いとすくに
明くる風そ 涼しかりける

本日藤枝の宿にやとりぬ
藤枝に 夏は
はなかき 宿なれハ
東のゆかり 何に
もとめむ

嶋田にやすみてそれより
朝またき大井川をこえぬ
るに 水ハ深けれと風もなく
やす〳〵と越けれは
こ、にまた 名に
きこえたる 大井川
やすくもこゆる
今朝の旅人

金谷の宿をすきて中山
にか、りぬ 夜鳴石を見て
石に聲
なくて
蝉啼 山路かな

日坂をすきて
廿一日掛川の宿にやとりを
もとめて
涼しさの水
かけ川の 宿に又
松のしつくに そて
ぬらしつ、

袋井を過て見附もあとに
見なしつ、 池田の宿にいこひ
こころにか、る雨雲はれて
天龍川にそつきにける
早き瀬に さす
ふな棹の ひまも
なく のほり下りの
天のたつ川

廿二日濱まつに旅やとりし
たり
暑き日も はま
松かえの 音聞ていさ
める駒に 追風そふく

味方の原にて
矢さけひの おとハ
むかしに なりぬらん
けふは小松を 行そ
めてたき

引佐峠にて
けふはまた 引佐
峠を越ゆけハ
暑さわする、
山の井の水

此峠を登るに 大谷村といふ
有こ、にめつらしき松あるを
人にとへは 子そたて松とて
人〳〵願をかくると聞に 我も
こたひ誕生をまつ身なれハ
その松に願をかけて
千世萬 結ふ
ねかひハ若みとり
みとりをそへと
子そたての松

本坂峠を登りて見るに
荒居の海面かきりも
なく見渡されたり
山高く 登りて
見れハ 海面の
名さへ荒居の
波そ立ける

廿三日吉田にやとりこ、を立て
行に 此里の大橋といへるを渡る
橋の名を 人に
とは、や よし田なる
朝日まはゆく
見え渡かな

廿四日岡崎の宿にやとりて
あすハわか國に入ぬる日なり
今宵は旅のはてぬる祝井
事とて 供したる者ともに盃
とらせたり 寅の時にもなり
なんと思ふ頃 此やとりを立
けるに 矢作の橋を過る頃ハ
いまた夜も明さりけれは
夜をこめて いそく
旅路の 道なれハ 渡
瀬もはやき 矢作
てふはし

鳴海の宿にていこひぬ

日にましに 東路
遠く鳴海かた
よせてハ帰る 浪ハ
あれとも

熱田の別園に入りて少しく
いこひ はやくも名古屋の城に
つきて 先の亜相にも逢て
無事をよろこひあへりけり

夏たちし 旅の
ころもノ 日ころへて
はやくも秋ハ 近つきにけり

天保十四癸卯年
水無月
齊荘

②(表紙・題箋)
「岐阜の道しるへ」

(本文)
天保十四といふ年の九月廿日
あまり一日の日 岐阜の里に
行む事を思ひ立て 旅の
よそひして名古屋の城を
立出ぬるは寅の時にそ有ける
ほとなく大幸村なる大幸橋を
渡りゆくに 此橋の左りに
わたせる橋の名を問ふに
朝日橋といひけれはよミける

ほの〳〵と 明る朝日のかけさして
橋の名しる、 見え渡るかも

白山の社あり 榎の権現といふ
菊理姫命を祭るといふ
清音寺をすく 此寺ハ妙音院
相國師長の妾の後の世の
為にとて建たるよし 清音の
名は琵琶の音によりて
名つけたるとか聞し枇杷嶋
といふあり 是も師長帰京の
時 妾の別を惜み かたみの
琵琶白菊と名付しあり
其琵琶に歌を書て此川に
しつみはてしとなん 其哥に
よつの緒の しらへにかけて
みさせ河 沈はてぬと 君に傳へよ
とよみしよし 此白菊の琵琶ハ
わか城に蔵したり 我も昔を
思ひやりて

よつのをの しらへハ沈 此川に
た、白菊の 名のミ匂へり

此枇杷嶋の文字も琵琶嶋と
書たるを いつの頃よりか書たかへて
枇杷嶋と書り 今又あらため
まほしくそ有ける 二ツ圦と名付し
所有 古や伊奈備前検地の時
圦を作りそめし所也といへり
新川橋を渡る 此川天明の頃
わか家人水野何某か堀て水を
かよはせしといへり 此川いて
きしより春日井郡に出水の愁ひ
なく 冨たる地となりぬるハ
またくかれかいさおしなり
早川か家にいりて少しくいこひ
たり 此家をはなれて作れる川の
亭有 こ、より望みれは右の
方に五条橋見え渡りたり 此
清須の里ハ古き地にて 正徹か
慰草にかける哥に ふけにけり
流る、かけも 川浪の 清須に
すめる 短夜の月 夏の夜の
風の清須に 住鶴の 霜のふり
羽の 色そ寒けき なと見えたり
又宗長手記の連哥の發句に
さきさかす 木は夏木立 花も
なし 朝雲はいるや しの、め
郭公 是清須にての句なるよし聞
傳たり われも此前にて

有明の 水も清須の 月かけに
魚木に登る けしき見えけり

御園神社の社あり 古伊勢の
神領にて御園村とい、し
よりて伊せの大御神を祭る
よし 六角堂あり 尾陽の六地蔵

の一所にて 霊佛なるよし 夫より
宮重村にいつる 尾陽の産宮重
と名つけ蘿蔔の種 此所より
いつるなり 下津村を過るに 人の
語るハ 雅世冨士紀行の内に
ある哥に 菅路をもいそき
来にける 旅なれや月にかり寐
の 夜を下津まて 又堯孝法師
の覧冨士記のうちにある哥に
暮にけり 触るてふ 駒を引
とめて 今や下津の やとをた
つねむとあるよしかたりぬ
われも此下津にてよミける

立つらく 松原遠き 里なれは
こまをはやめて 下津とやいふ

長嶋山妙興禅寺にいたる 此寺
貞和四年の草創にして勅願
所也 倫旨 御教書 古き書
巻多し いそきぬれは見すして
過ぬ 牛野といふ有 是も堯孝
覧冨士乃記によミたる哥に
おのか毛の 黒田も近くなりに
けり わくる牛野に つ、く
あし原 夫より宝部山地蔵寺に
至る こや神龜年中行基
菩薩ひらきたる真言のふる
寺也 真墨田太神宮にぬかつき
ぬ 此社尾陽の一の宮といふ 赤
染右衛門のうたに 賤の男か

種ほすといふ 春の田を つくり
ます田の 神にまかせむ 又阿佛の
いさよひ日記に　いちの宮
名さへなつかし 二つなく 三つなき
法を 守るなるへしと見えたり
此一の宮をもる但馬か家にて
昼の飯をと、のへたり 但馬かよみて
出しける歌に
　数ならぬ 身にも心ハ 一つ なき
　いちの宮なる この実捧けて
とありければ かへしよみておくる
　二つなき 一の宮居の みとしろも
　つくります田を 神や守らむ
酒見神社に参る 此神本神戸
村にありし 古へ伊勢の大御神の
神戸なりといふ 黒田村を過 此
驛古き地なるよし 夫木抄為相
のうたに　遠近も いまはた
見えすうは玉の 黒田の里の夕
やミの空 又正徹の哥に　夜も
すから 光りは見せようは玉の
黒田の里に 咲る夘の花　た
まの井の里は行道より遥に
西に見えたり 雅経の歌に
思ひ出や みたらし川に せしみそき
忘れぬ袖の 玉の井の水 伏屋
村を過行に 此伏屋の名は
信濃の国 園原の伏屋とおなし
ためしにて 古しへ大ひなる川の
舩渡しある所には 旅人の舩
を呼てこなたの岸につくを待合
するかりそめの家を立て 布
施屋と名つけしよしハ 國史に
見えたる旧地なり 三宅村を
過行に 此地やむかし屯倉と
云ていまいふ郷蔵の有し地なる
よし 日本紀安閑紀に尾張國
真敷屯倉 入鹿屯倉とあるは
真敷の屯倉の地ならん もとり
かたし 堺川あり いとせはき川
なり 堺と呼ハいつくの堺なる
やととふに 古しへ尾張 美濃の
堺川なりしを 天正十年織
田信雄の尾張を領せし時
秀吉其領地の廣きをいとひ
又軍の要害をよはかりしめむ
かために 今の木曽川を國堺と
せしむ 其後此川小流となりたり
羽栗郡 中嶋郡 海西郡の内
お、くのむら〳〵 いまは
美濃の国につきたり
加納城のまへをすきぬ
此城もとハ奥平信昌
にたまはりてその
室加納姫君の居給へる
となり いまハ永井肥前
これを守る 行〳〵て早くも
岐阜に着ぬ 古しへは井の口と
いひしを 信長在城の時 周の
岐山になそらへて岐阜と改しと
なり 此所の街の木戸といふを
たてたるにミな笠木あり 是ハ
信長此城に有し時 隣國の
諸将又使に来るもの共の鎗
をふせさする為に作りしと
いへり 猶今に至るまて笠木
ある木戸は岐阜にかきれり
木曽川の堤にて細うつを見て
夫より舩渡しにて圓城寺村
にいたり 此処をつかさとる、
野垣か家にていこひぬ 茶亭
有て釜の湯の音したるも いと
風韻あり 此地にいとすくなる
竹の有けれはきらせたり 野
垣ニおくれるに
　世はなれし 野垣の内に 来て
　　みれハ
　まつ吹風の 音のしつけさ
なとよミて 此所を出て申の時
過る頃 賀嶋か家に入りてい
こひぬ 酉の時過る頃 此やとを
立出て長良川江行 舟に乗て
行ほとに 右も左もあまたの
人々ともし火をか、けたる 其
数千々のほかけならむ 雲に
棚行水にうつろひて昼より
も猶あかくそ有ける 此川を
こき登りつ、ゆけハ 右は
金花山のしりへにて いとけは
しききり岸なり 見つ、行
に程なく篝火をてらして
鵜舟の遠かたよりこきつれ
たる火のけハ 浪をやくかと
思ふ計なり 次第〳〵に近つく
にそ 鵜飼の舩は千を重るに
猶あまり有舟数なれは 見
るもまはいくさらに宵やみ
のけしきハなかりけり か、る
さまは聞しにまさりて 人にか
たるともかたりもつくさし 筆
にうつす共 筆にも及はぬは
此夜のけしきにそありける
　思ひきや 長良川原に 宵
　　やミも
　しらぬ鵜舟の 数を見んとは
　めつらしや 東にハまた なから川
　鵜舟の篝 空に棚引
金花山を見てよミける
　やみの夜も 星の光の か、やきて
　こかね花咲 やまそ此山
長良川にてとりたる鮎を河
原にてやきていたせをたふへぬ
るに いと味ひよく作るものなし
供したるものともにもあたへ

けれは ミなひたくひにくひたり
はからすも山のあなたを見わた
せは 夜の明るかとほのめく山の
かひより月のさし登りたるハ た
とへむにものなく見もいはれぬ
けしきなり 是をも見すてかた
くまたともし火 篝火のかきり
みんと思へとも 夜の更行は
亥の時過るころまた賀嶋か家
に帰りて宿りぬ 廿二日朝辰の
時 此やとを出て金花山に登り
ぬ 此山を稲葉山とも岐鏡山
ともいふ 行平の歌に 立わ
かれ いなはの山の 峰におふる
まつとし聞は いま帰りこん と
よめるハ因幡の國といふ説あれと
も 此金花山なるよしは 八雲
御抄また範兼抄に見えた
り 古城跡有 この城建仁年
中 二階堂藤原行昌始て築
き 子孫住し後 應永年中
斎藤帯刀 藤原利永其子孫
数代住し 其後秀龍入道 道
三父子 また信長 信忠 信孝
池田紀伊 輝政 岐阜中納言
秀信に至るまての居城なり
し 七曲坂あり 此城の大手口な
りしよし 藤右衛門洞といふ有
秀信の家臣津田か屋敷跡
なるよし 大曲と名付しところ
有 是より亥子の方に岐阜
町々長良川眼下に見ゆる
達目洞(タチモク)といふ有 稲葉大神古
縁起に見えたるふるき地な
り むかし墾(ハリ)開て田畠となり
ぬ 樫原の砦 石田三成か家士
樫原何某守りしを 慶長五年
八月廿三日浅野幸長攻落し
たる旧地なり 七曲峠を越行に
辰の方に鷹の巣山見ゆる 古し
へ鷹をとりてわか家の祖にお
くりしより山の名となりぬるよし
此峠を登りて申の方に大垣の
城見ゆ また武藤峠に登る
此処をむ藤九折ともいふ 岩
石の道屈曲して桟あり 秀
信の臣武藤何某か砦の跡
なり 厩の跡あり 秀信の時馬
数十疋を置たる所といふ 松
田横といふ高き所あり 秀信
の臣松田何某の砦へ通ふし道
なりしよし 爰ゟ名古屋の城
小牧山午の方に見ゆる 古の松
田横をまた登りて未の方に
加納の城見えたり 焔硝蔵礎
のあと今にのこれり いと高き
所に太鼓櫓の跡あり 古は
敵軍おそふ時にうちし太鼓な
れは かく高き所に設おきぬ
るよしなれと 今は名のミ残れ
り 一 の門有 是城の大手なるへし
切通しあり 岩石険阻にして
通路施たるを切ひらきて かく
名つく 二の門あり 此門殊に
厳重に構へたりと見えて
其形今に存せり 下臺所
跡いまいふ賄方に当れり 是
より上臺所まて岩石険阻にして
上り下りなやましき道也 上
臺所あとあり 今云膳所と見
えて井二ケ所有 いかめしき岩
を堀うかち山の頂にか、る清
水のいつるハめつらし 是金生
水といふに叶ひ 此山金花山
といへれハ 金氣より湧いつる水
なるへし 馬冷場あり いまは
水なく名のミ残れり 廊下
の跡あり 是ハ上臺所ゟ天守
臺までの桟道なるへしと見ゆ
天守臺あり 此山の頂にて 殊
に高く四方の眺望世に類ひ
なし 北東の方に雄総村見ゆ
是夫木抄に衣笠の内大臣
の歌に かりそめに見しはかり
なる はし鷹の をふさのはら
を 恋やわたらむ 又藤川の記に
七夕の 逢瀬は遠き かさ、きの
雄総の橋を まつやわたらむ と
よみし名所なり 枕の草紙
に雄総の市 大和物語に雄総
の驛なと見えたるも 此所なり
東の方に鵜沼の山見ゆ 是
も後拾遺集に源重之の
哥に 東路にこ、をうぬま
といふことハ 行かふ人の あれはな
りけり 藤原仲文家集にゆ
きかよひ 定かたきハ 旅人の 心
うぬまの 渡なりけり と有も
此鵜沼にてよみし歌也 又
東南のかたに各務野みゆ 是ハ
青野 各務野 加茂野とて いと
廣き野の三所有し故 國
を三野といひそめし 其一所
なり 其外伊吹山 養老の山
加賀の白山 遠近の山〳〵多く
見渡されたり 鏡岩といふ有
天守臺の北東の山下長良
川の南岸にあり 其外こと
に深きふちにて 水の色藍の
ことし 元和元年大坂御
陣済てのの ち
台徳公還御の時 岐阜に
入らせられ この渕にて水れ
むを試給ふ 御勇猛思
ひやられたり 此金花山に
カゴの木といふあり 外に絶て

なき木なり 古神代にかこ
弓といふ有ハ 此木もて作れりと
ある人考いへり 珍らしければ
根こして家のとにしたり
千畳敷の跡なと見つ、 又
岐阜の里に出て機織業を
見てよミける
　賤の女か とる手もゆらに
　　織出す
　あきの錦の 色にたくへて
夫より稲葉山に登りぬ この山に
桜の多く有なれハ 春ハ花に
めて、 人々むれつ、遊ふよし聞て
　花はいさ いなはの山の 紅葉
　　はに
　ゆう日うつろふ 秋の色かも
また加島か家に帰りてやとりぬ
廿三日巳の時頃 こ、を立出て
西かけ所となつけし寺に行
此庭に百枝松といふありければ
　ふる寺の 松の百枝の 枝ことに
　千世を重て 幾世へぬらむ
木材をなりはひとせる者の
家にて小休したるに 茶亭に
釜の湯の音 松風にたくえし
かはゆかしくて 一碗を喫して
長良川を越 笹を家の名と
せるもの、別園にて ひるの飯
と、のへたり 此家の高とのに 文臺
をすえ短冊なとおきぬれは
供したるものとも おのかし、哥
書たり われも戯によミておくる
　宵はさそ 月のこかねの 花の山
　千世もかはらし 呉竹の宿
此むかひに此家の主のすめる
家ありこ、にも立よりて見る
に また茶亭あり 釜の湯
も客まちかほなり 此亭いと
こけむしてひなひたる作りにて
いと興あり ほとなく長良川を
越て見れは 此川にて鵜遣ふ
ものとも鵜に餌飼するを見
たり また其鵜に追はる、
鮎をとるを手いなつりとい、て
ものしたるを見つ、 又賀嶋か
家に帰りてやとりぬ 廿四日
寅の時此やとを立て遠藤
か家にていこひ 黒田村善龍
寺に立より 妙興寺を過ぎて
佐分但馬か家にて昼の飯
と、のへぬ いま帰り路にて思ふ
にミの、國岐阜のあたりいかに
もひなひたる地にて 何な
くさむるもあるましとお
もひつ、始て来て見れは
街の家々つき〳〵しく
いつれもにきはしたり 家毎
に茶亭なとまふけたり
三日あまり此里にありしに
興さらに尽す心をのこす
はかりなり 申の時過る頃 城
に帰りぬ 道すから見聞たる
ことを書しるしつれともらし
ぬることや多ありなむ
　天保十四年九月下浣
　　齊荘

③（表紙・題箋）
「知多の枝折」

（本文）
十月朔日 知多の郡にゆかむ
とて旅のよそひして 夘の時
よりそ出立ぬ 道すから雲立
て時雨のあめふりいてぬれと
やかて空はれたり 山崎か家
にて少しくいこひぬ こ、に茶亭
あり 文臺に色紙 短冊を設
おきたり あるし哥よミて出
せる其歌
　御恵の 露おき初る 村紅葉
　けふより後や 世を照らすらむ
とありけれは かへしよみておくる
　初時雨 色そふ庭の もみちはを
　かへるさとハ、いか、あるらむ
　また戯に
　山崎や 紅葉栄ある
　　時雨そら
鳴海にてひるの飯と、のへて
　松風の 聲かと聞ハ みるめなき
　よそに鳴海の 浪の音する
水主か池といふ所にて小休して
程なく村木村にいたりぬ 小嶋か家
にてまた小休したるに 茶亭あり
て釜の湯の音も客まちかほなり
床に板硯 色紙 短冊ありけれ
は 哥よミて送る
　神無月 けふハ時雨の 始にて
　うすくもこくも 紅葉あやなす
緒川なる善導寺に至れハ はや
酉の時過ぬといふ 此寺に聞慶
とていと老たる僧のうた
よみて出せり
　知多の浦 年のよる浪 より
　　そへて
　たまのを川に ひかん君か代
　大君の きつ、衣の浦 清く
　ミちひく 波によるかり寝かも
此里は夘の花の名所なれは
とて夏の頃咲たる夘の花を
紙にをして哥そへて出せり
　まつ思ひ 雪とつもれは 夏へても
　消ぬを川の 夘の花の雪
かくはかり心をつくしたる夘の花
の色にめて、返しよみておくる

消せしと 袖につ、みし 夘の花の
ゆきより深き 心をそしる
二日善導寺を立出ぬるハ 夘の
時過る頃なり 藤江村にて小休して
はやくも 龜崎にいたりこ、にて
ひるの飯と、のへたり 高とのに
あかりて見渡せハ はるかに伊勢路
の山々くまもなく絵かくことし
此浦にて網をひかせぬれハ 鯛
てふ魚の十あまりもか、りぬ
浦嶌か 子ハ釣かねし 鯛をさへ
けふひく網に 数そか、れる
乙川に小休して半田村なる
中野か家にやとりぬ あるし
うたよみて出せり
住馴し 衣の浦の うら人も
かひある御代に 逢そ嬉しき
三日中野か家を立て長森
に小休して 行ての田面に鶴
のたてりければ 鷹もてあわせ
つるにとりたり 此鷹なむ
過し年 本邸より給りたる
館塒と名を呼たる鷹なれは
かくはかり 恵も深き 鷹なれは
ちとせの鶴も とり得つるかな
布土の里にて少しくいこひて
河和村水野の家に行て
昼の飯と、のへたり 棚に料紙
硯 短冊ありければ 歌よみておくる
磯近き 河和の浦に 住田鶴の
ちよはふらむ 声のさやけさ
此家にて鷹あつかふもの
ともに盃とらせたり こやけふ
なん鶴とりたる祝いことなり
此家を立出て 岡坂山に登りて
いこひぬ 此山いと高き山にて
見渡したる海原のかきりに
遠かたの山々に猶たちまさりて
見ゆるハ富士の芝山なりや
かて夕日の光りにけおされて
見えすなりければ
するかなる 富士の芝山 しはらくも
見はて、あやな 夕日うつろふ
大井村を過行に 三ケ月のかけ
ほのめきて 枯たつる艸の中に
松むしの啼たるを聞て
三日月の かけはかなくも 聲立て
われをまつらん 松虫のなく
ひえ狭間てふ所に暮うちて
小休したり
ひえ狭間 冬田に
寒し
三日の月
山路を登りくたりしつ、
いと行安からぬ道をすきて
師崎に着ぬ 千賀の家にて
かり枕むすひたり 夜もす
から浪の音のミ聞えて いを
安く寝られさりけり
師崎や 今宵ハこ、に
仮寝して
まつ吹風の 波まくらかも
四日此家を立出むとおもふ
頃 すなとりするものともの
舟を漕出て沖邊にて
鯨てふ魚をとるさまを
なしてすてにとり得たりと
いふけしきをもなせり みな
白きぬのを手ことに持て
ぬさの如くなひかしつ、 聲
をあけて謡ふ いかなるうた
なるや あまたの舟人のひとしく
聲をたつれは さたかにハ
わかねとも めてたき言葉を
作りてよろこひ祝ふこと
あけにや有らん うたひ
終りて皆々手打た、きて
のち 舟のうちにうつくまり
たり また外に舩を出して
鮑をとり網をひきつ、
多くの魚をとりて出せ
り 辰の時過る頃 浦傳ひ
して日和山と名つけし山に
登りて見れは 海原遠く
かきりもなく 見渡されて
ちかきは日間賀嶋 篠嶋
龜嶋 三河の國の山々

まてくまもなし 鼠嶋と
いふ有 むかしより鼠のミ
すむよし 里人のものかた
りぬ はるかに見ゆる山の
かひより いとさ、やかに
富士の山見えたり 此
ところの眺望いはんかた
なく 筆にも及ひかたきなかめな
り 須佐の入江なる波うちきはに
岩を根として生出たる松を
恵比須まつといふよし聞て
名に聞し 岩くす舩の 岩ニ生ふる
まつをひることうへも呼けれ
久村内藤か亭にて小休して
東端に出ぬ 前野か家にて
ひるの飯と、のへて行程に 柿
並村にいてぬ こ、に大坊とて
寺の名は大御堂寺といへり
此所長田の庄司か屋敷あ
となるよし 義朝を此所にて
長田か弑せし由 其図をわ
か祖のものして 探幽の十あ
まり八ツになる頃か、せつるよし
二巻の掛絵となして 此寺に
蔵したり 門のまへに血の池
とてあり 此池にて義朝の
首を洗ひしといふ 松の林
のうちに義朝の塚また信孝
康頼 池の禅尼 政清の塚とも

いと苔むしてたてり あな
ひの僧の出て ものかたりし
たり 野間の邊に長田蟹
とて かたち人面のことくなる
蟹いつるよし いまは寒き
時なれハ 穴に深く入りてい
つる事なしといへり 上野間
大仙寺にていこひ 内海を
見て

波あらきうつミのはまの
塩風に
やすくも過る 千舟も、舩
大谷なる来王寺にていこひ
はやくも常滑なる正住院に
やとりぬ 此里ハ陶器作るもの多
く 常滑やきとてふるき世より
そつたへ来にける 此寺の園に
そのもふけしてすえもの作る
ものを呼てつくらせたり 成岩
の里に住米をなりわひとせ
るものの母なるよし いと老て
頭にハゆきをいた、きたるか歌
よみて出せり

有かたや なからへし身の 果報とて
ゐなから君を 拝む嬉しさ

徳川の 清き流ハ このま、に
や千世とよはふ 君か齢を

五日辰の時過る頃 此寺をいて、
常滑やきをものする竈ある
岡に登りて見るに かす〳〵の
すえもの洞のことき かまの内
につめたり 此所を立出て
大野村平野か家にて昼の飯
と、のへて 海原を見つ、 海
はまを衣の浦といふと聞て

浪あらき 衣の浦に 啼千鳥
かせ吹かへす 聲そあやなる

夫より北山長浦にて小休
しつ、 古見の里成瀬か家に
て少しくいこひ 行々て
横須賀の里に着ぬ 村瀬
か家の前にて万歳といふ
ものいて、 千代萬代と祝ひ
つ、 つ、みうちならしてうた
ふさま いと興あり 村瀬か茶
亭に入りて見れは 二畳中
板に作りなしたり 床に文臺 硯
短冊を設おきぬれハ 哥よみて
暮たり

磯山や 田面をさして 啼鶴の
ちよ萬世の 横須賀の里

冬牡丹の咲たるを鉢に植
て出しけれは戯に

釜のにえ 尽す
こ、ろや 深み艸

なと云捨ていつるに 大教院
といふ古寺を過ぬ 此園に
木立ものふりたる松あり
名をとへは琴ひき松といふ

名に立し 松吹風の 聲すみて
こ、ろひかる、 琴の音そする

行ての道より遠くへた
たりてふる塚の見えたるを
人に問へは 業平塚といへり

猶匂ふ 言葉の花ハ 有はらの
ふるつか見れは 哀をさ
そふ

六日夘の時 此やとを立出て
平嶋の里に小休して程なく
大高なる山口か家に入りて
ひるの飯と、のへて鳴海の里
をすき ふた、ひ山崎か家
に至りていこひぬ 茶亭
に入りて見れは 過る日こ、にて
よみてとらせたる哥を 早く
も粧ひして床にかけたり
またあるし歌よみて出せり

大君の 大御ことはの 花の香を
ゆく末ひろくあふきあふかむ

と有けれは 返よみてとらせたり

うつろはぬ 此草の屋の
もみちはに

設なしたるこ、ろさへ見ゆ

此屋とを立出て酉の時過る
ころ城に帰りぬ 道すから
見聞たる事をあら〳〵し
くも筆にまかするになん

天保十四といふとし
神無月
はしめつかた
齊荘

金鯱叢書 第五十二輯 〔年一回刊行〕
―史学美術史論文集―

令和七年三月三十日 編集
令和七年三月三十日 印刷・発行

編集者 深井雅海
徳川義崇

発行者 〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話（3950）〇一一一番（代）

〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話（3950）〇一一七番（代）

印刷所 〒461-0023 名古屋市東区徳川町一〇一七
徳川美術館
電話（935）六二六二番（代）

〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版
電話（533）六八六〇番（代）

©2025 THE TOKUGAWA REIMEIKAI FOUNDATION